

東 那 珂 4
烏 田 1

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第637集—

2000
福岡市教育委員会

東 那 珂 4

烏 田 1

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第637集－

2000

福岡市教育委員会

序

玄海灘に面し、「活力あるアジアの拠点都市」を目指す福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる私達の重要な務めであります。福岡市教育委員会では、近年の開発事業によって失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書に収録した東那珂遺跡第4次調査は、都心周辺部の交通の利便性を高め、慢性的な渋滞を緩和するために計画された、都市計画道路竹下駅前線の延長に伴うもので、多くの貴重な成果をあげることができました。また、烏田遺跡第1次調査は、郊外と都市部とを結ぶ都市計画道路柏原久山線の新設に伴うもので、今回新たに発見された遺跡です。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を高める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。また、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 竜一郎

東那珂3

- 東那珂遺跡第4次調査の概要 -



調査番号 9820
遺跡略号 HGN-4

例　　言

1. 本章は、道路新設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、東那珂遺跡群第4次調査（福岡市博多区東那珂2丁目）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・佐藤信・大濱菜穂が作成し、大庭・大庭智子が
　　墨書きした。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、大庭康時・佐藤信が作成し、大庭・井上涼子・大濱菜
　　穂が墨書きした。
6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・上塘貴代子・下山慎子・中川真理子・萩尾朱美・
　　森寿恵があたった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、收
　　藏・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9820	遺跡略号	HGN-4
調査地地番	博多区東那珂2丁目	分布地図番号	23雀居
開発面積	1644m ²	調査面積	384.6m ²
調査期間	1998年6月16日～1999年8月20日		

目 次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
4. 東那珂遺跡における既往の発掘調査	4
第二章 発掘調査の記録	5
1. 発掘調査の方法と経過	5
2. 基本層序	6
3. 発掘調査の概要	6
4. 遺構と遺物	10
01号遺構	10
04号遺構	11
19号遺構	11
22号遺構	12
23号遺構	13
29号遺構	13
36号遺構	14
42号遺構	14
43号遺構	15
50号遺構	18
52号・53号遺構	18
55号遺構	19
56号遺構	20
58号遺構	20
60号遺構	21
71号遺構	22
76号遺構	22
77号遺構	23
83号遺構	23
86号遺構	24
1号掘立柱建物跡	28
5. その他の出土遺物	28
第三章 まとめ	45

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

都市計画道路竹下駅前線は、JR竹下駅から国道3号線までを一直線に結ぶ道路として計画されたもので、すでに竹下駅から国道3号線の130メートルほど西を走る県道147号線（旧国道3号線）までの1100メートル分については開通している。この未開通部分の内、未舗装の約700メートル、1644平方メートルについて、平成10年4月3日付けで福岡市土木局道路建設部東部建設2課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して、埋蔵文化財の事前審査願いが提出された。申請地は福岡市文化財分布地図で東那珂遺跡として登録された範囲の東端に位置しており、埋蔵文化財の遺存が予想された。また、東那珂遺跡では、平成六年度にも同事業に絡んで発掘調査が実施され、古墳時代・古代・中世の遺構が検出されている（第2次調査）。

埋蔵文化財課では、申請地内に6本のトレーンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、東那珂遺跡の予想範囲に含まれる西半分では、旧河川と近世以降と推定される時期不明の水田が検出されたにとどまったが、むしろ東北部分で縄文時代晚期から古墳時代前期にかかる遺物包含層を検出、その後の層を中心に水田が検出される可能性が想定できた。よって、申請地東北部分において発掘調査の必要があると判断し、東部建設2課との協議にはいり、平成10年6月中旬から3.5ヶ月の予定で発掘調査を実施、平成11年度で報告書を刊行するという工程が決定した。

発掘調査担当は、埋蔵文化財課2係の大庭康時とし、6月9日にそれまで発掘調査を実施していた博多遺跡群第107次調査事務所より発掘調査器材を搬入、6月16日より表土掘削に着手し、発掘調査を開始した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊（前任） 西憲一郎（現任）
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	柳田純孝（前任） 山崎純男（現任）
	同	第2係長	山口康治（前任） 力武卓治（現任）
調査庶務	同	第1係	谷口真弓
調査担当	同	第2係	大庭康時
調査補助	佐藤信 大濱葉絹		
調査作業	石川君子 井口正愛 江越初代 大久保学 大庭智子 折茂由利 北川貴洋 清水明 関加代子 曾根崎昭子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 長友忠史 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 森垣隆視 山内恵 吉田清		

3. 遺跡の立地と歴史的環境

東那珂遺跡は、福岡平野を北流する御笠川東岸の沖積地に位置する。現況ではほぼ平坦な水田地域だが、旧地形としては御笠川や那珂川などの大小の河川によって形成された。中・低位の段丘と沖積低地によって構成されている。おおむね、低地部分に水田、段丘上に集落遺跡が立地している。今回の申請地は、その西側を旧河川（御笠川本流の旧河道の可能性もある）の名残である水路に画されており、地形的には東那珂遺跡の中心部分が乗る段丘とは切り放されている。現況で条里地割がよく残り、試掘調査によても、時期は近世以降に下るが水田跡が確認されており、早くから水田化されていた事がわかる。

東那珂遺跡の周辺には、様々な時代の重要な遺跡が密集している。今回の発掘調査地点から東に300メートルほど離れた雀居遺跡は、縄文時代晩期の土塙墓、弥生時代の大型掘立柱建物跡、土坑を主体とする古代の遺構などのほか、木製短甲・櫛・案などの弥生時代の多彩な木製品が出土している。雀居遺跡の東側には月隈丘陵が延びている。この丘陵上には、横帯文銅鐸の鋳型を出土した赤穗ケ浦遺跡、内行花文日光鏡を出土した宝満尾遺跡、後漢鏡の鏡片が出土した大谷遺跡などが分布し、壇棺墓群が点在している。

御笠川を隔てた西側の段丘状に立地する那珂遺跡・比恵遺跡は、縄文時代晩期～中世の複合遺跡である。那珂遺跡では、縄文時代晩期の二重環濠集落や弥生時代の環濠集落跡・壇棺墓群などを見つかっている。特に銅戈・銅劍の鋳型・鋳型中子の出土が示すように、弥生時代の青銅器生産の拠点のひとつと言えることができる。古墳時代前期には、福岡平野最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれた。主体部は現在の社殿の下になつていて調査できていないが、第2主體部からは、三角縁神獸鏡が出土している。また、古墳時代後期の前方後円墳である東光寺剣塚古墳の横穴式石室には、阿蘇巖灰岩の石屋形が置かれている。これらの前方後円墳は、福岡市・春日市・那珂川町にまたがって点在する福岡平野の首長墓の系譜を構成するものである。

比恵遺跡も弥生時代の環濠集落として著名である。中期前半の壇棺墓から出土した銅劍に付着していた網織物は、日本最古の出土例とされる。青銅器の鋳型・取瓶も出土しており、青銅器生産が行われていたことはほぼ確実である。古墳時代後期では、大型の掘立柱建物群や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536）条に見える「那津官家」との関連が論じられている。

大きく蛇行した御笠川を隔てた南側の沖積地には、那珂君体遺跡がある。弥生時代後期の大規模な堰や古墳時代前期の水田、古代の溝・道路遺構が調査されている。那珂君体遺跡の南側は、板付水田遺跡、さらに段丘上に板付遺跡が続く。

板付遺跡は、わが国最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落として、国指定史跡となっている。壇棺墓群も伴っており、前期末の壇棺から繩形銅劍・銅矛が出土しているほか、後期の堅穴住居跡からは埋納されたと考えられる小銅鐸が出土している。

さらに南にたどると、近年調査成果を増しつつある井尻遺跡を経て、春日丘陵の遺跡群にたどりつく。これは、いうまでもなく「奴國」の中心遺跡である。「奴國」半島とされる須玖岡本遺跡、青銅器工房とされる室町遺跡、鉄器工房の赤井手遺跡など貴重な成果を上げた遺跡は数多い。

大野城市と福岡市にまたがる仲島遺跡では、これまでに福岡市側で3次、大野城市側でも6次を越える調査が行われている。それによると、仲島遺跡は弥生時代中期前半から奈良時代、さらに鎌倉時代にわたる複合遺跡である。注目すべき遺構・遺物が多く、貨布（王莽錢）、後漢鏡片、青銅製動矢、銅鏡、銅矛鋒型、滑石性模造品、人面墨書き土器などが出土した。



1. 東那珂遺跡 2. 鴉居遺跡 3. 比恵遺跡 4. 那珂遺跡 5. 那珂君休遺跡
 6. 板付遺跡 7. 高畠遺跡 8. 諸岡 A 遺跡 9. 諸岡 B 遺跡 10. 五十川高木遺跡
 11. 井尻 B 遺跡 12. 笹原遺跡 13. 三筑遺跡 14. 麦野 A 遺跡 15. 麦野 B 遺跡
 16. 麦野 C 遺跡 17. 南八幡遺跡 18. 雜鶴隈遺跡 19. 井相田 C 遺跡
 20. 仲烏遺跡 21. 須玖遺跡 22. 曰佐遺跡 23. 席田大谷遺跡 24. 宝満尾遺跡

Fig.1 東那珂河遺跡周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

4. 東那珂遺跡における既往の発掘調査

東那珂遺跡では、これまでに三回の発掘調査が実施されている。その成果について、簡単に触れておく。

第1次調査（平成5年10月15日～平成6年3月15日）

住宅・都市整備公団九州支社による集合住宅の建設に先立って実施された発掘調査である。2400平方メートルを調査している。

古墳時代初頭の堅穴住居跡・土坑・奈良時代末から平安時代初頭の道路状遺構・溝・井戸・土坑・木棺墓・掘立柱建物跡・河川などを検出した。遺物は、コンテナ20箱分程度が出土している。主な出土遺物としては、墨書き土器（「屎丸」「本」「八代」など）、布目瓦、越州窯系青磁、及び堅穴住居跡の覆土中から出土した破鏡がある。

『東那珂遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第400集、福岡市教育委員会、1995年第2次調査（平成6年4月8日～5月20日）

都市計画道路竹下駅前線の道路拡幅とともに、実施された発掘調査である。400平方メートルを調査した。

古墳時代前期の溝、古代の掘立柱建物跡、溝、河川、中世の水路を検出した。コンテナ10箱ほどの遺物が出土しているが、ほとんどが奈良時代末から平安時代初頭にかけてのものである。特記すべき遺物としては、越州窯系青磁、白磁、瓦などがあげられる。

『東那珂遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第460集、福岡市教育委員会、1996年第3次調査（平成9年5月5日～5月22日）

民間の個人専用住宅建設にともなって、発掘調査を実施した。114.7平方メートルを調査している。第2次調査地点とは、道路を挟んで対応する。

遺物が少なく時期決定が困難だが、古墳時代前期の溝と中世～近世の井戸、時期不明の柱穴・土坑などが検出された。遺物は、コンテナ1箱程度が出土したにとどまる。土師器・須恵器・陶磁器の小片が出土している。

『福岡市文化財調査年報』vol.8 福岡市教育委員会、1999年



Fig.2 調査地点位置図 (1/4,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

試掘調査の結果から、現地表から調査対象となる遺物包含層までの深さは、230センチにおよぶ事が予想された。発掘調査に先立って、この表土部分をバックホーで除去する作業を行った。表土除去は、遺物包含層の上面までとし、それ以下については人力で掘り下げ、包含層直下の青灰色粘土面において遺構検出を行う事とした。なお、次に述べるC-1区において、包含層以下の堆積状況を確認するため、バックホーによる深掘りを行った。

包含層以下の調査においては、一辺3メートルの正方形のグリッドを設定し、基準線上に畦を残して、各グリッドごとに掘り下げ・精査・遺物取り上げを行った。グリッドは、南北に北からA～D、東西に東から1～6とし、両者を組み合わせて、A-1区～D-6区とした。ただし、調査区の周囲に面したグリッドでは、調査区壁面までをグリッドの範囲としたために、必ずしも正方形を為していない。また、調査に最初に着手した、調査区北端の張り出し部分は、0区として、グリッドに含めなかつた。なお、グリッド間に残した畦は、各グリッドの調査終了後除去した。

遺構実測は、全体の平面図を20分の1で、個々の遺構図については必要に応じて10分の1で作成した。土層図は、現地表から遺構検出面までの堆積状況をD-4～5区の南壁面で、包含層上面以下についてはB-C間と3-4間の畦においてそれぞれ20分の1で実測した。

発掘調査は、平成10年（1998）6月16日より着手、8月20日に埋め戻しを終了した。

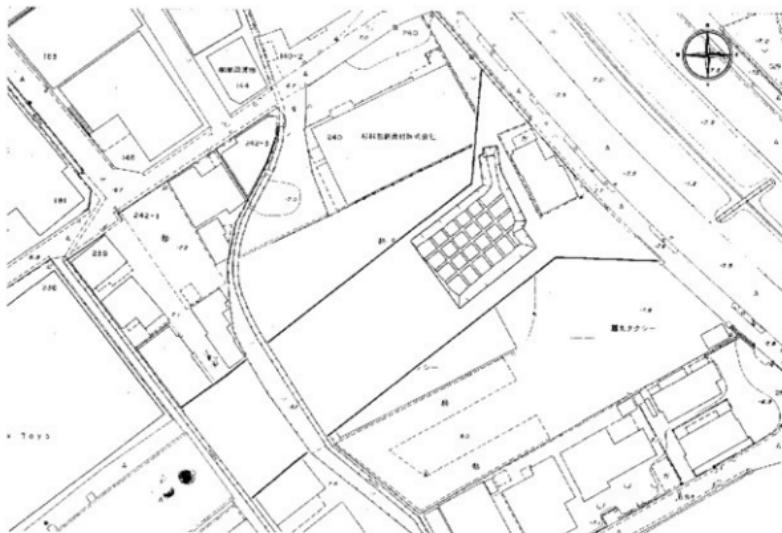


Fig.3 東部町遺跡第4次調査地点位置図 (1/1,000)

2. 基本層序

本調査地点の現地表は、旧水田を埋め立てたもので、標高約7.95メートルを測る。D-4・5区壁面で撮影したPh.11により、層序を説明する。

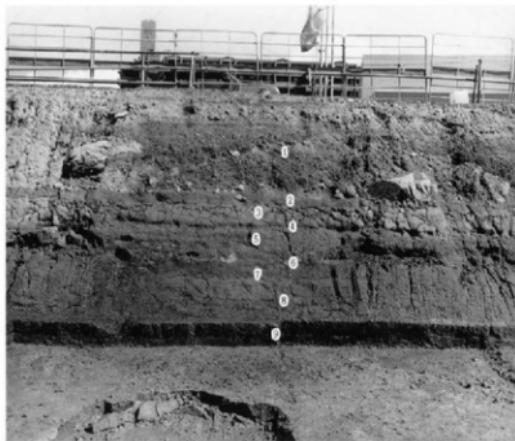
1は盛土層で、旧水田面から現地表まで1.8メートルに及ぶ。2は旧水田土壌である。4と7は砂層で、洪水による堆積物である。それぞれ4・8の水田面を覆う。8の暗灰色粘土層は色調の相違からみると、3層程度分層できる。9層が、調査対象である遺物包含層で、その直下の青灰色シルト質粘土の上面が遺構検出面となる。

包含層の堆積状況については、Fig.4を参照されたい。

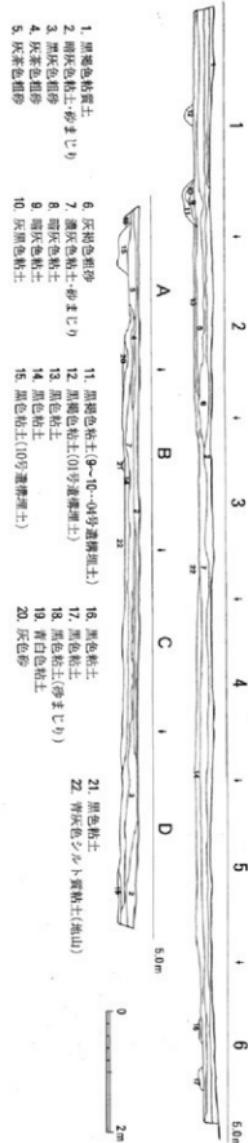
3. 調査の概要

今回の発掘調査では、当初水田遺構の検出が予想されていたが、それに反して生活遺構が検出された。検出した遺構は、柱穴・土坑・井戸・溝などである。時期は、縄文時代晩期末から古墳時代前期に及ぶ。遺構密度は薄く、集落の中心部分に当たったものとは考え難い。遺構分布、包含層の遺物量の多寡からみて、集落の中心は、本調査区の北西から北側に合ったものと推移できる。

なお、調査区南側の包含層中からは水田の畦畔と推定される



Ph.1 調査区南東壁土層D-4~5区（北西より）



造構が出土した。古墳時代前期の造構であり、古墳時代には既に水田化していたことが推定できる。出土遺物は、土器・須恵器などがパンコンテナ64箱、石器・石製品が1箱である。大半が、調査区全面を覆う包含層からの出土である。



Ph.2 包含層堆積状況

- (1) A～3～4ベルト（南西より） (2) C～D～3～4ベルト土層（南西より）
(3) B～C～2ベルト土層（北西より） (4) B～C～6ベルト土層（北西より）



Ph.3 調査区全景 (1) 南西より (2) 西より

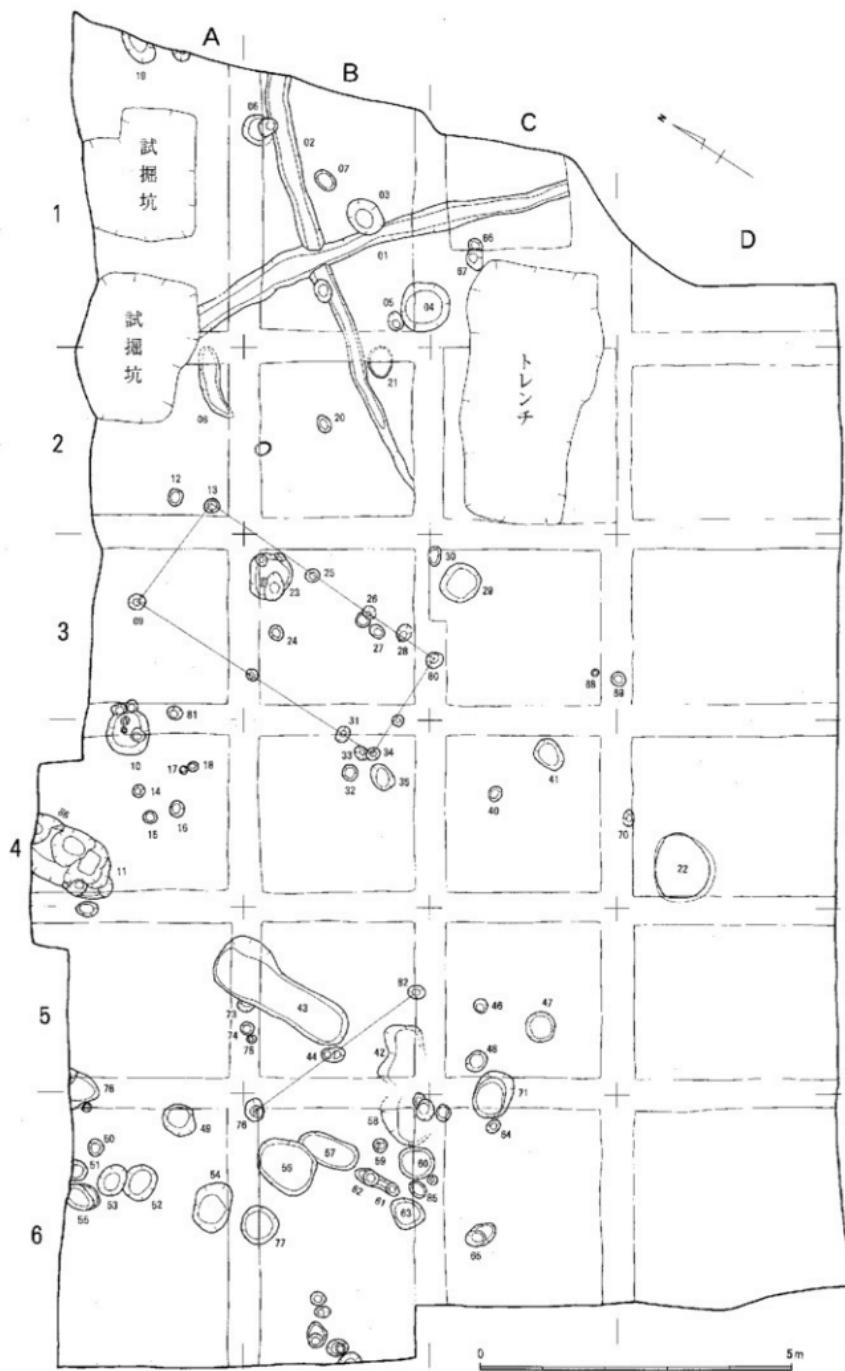


Fig.5 検出遺構全体図 (1/80)

4. 遺構と遺物

前節述べたように、今回の発掘調査では、溝状遺構・土坑・井戸・柱穴・畦畔状遺構などを検出している。出土遺物が極端に少ない、または全く出土遺物がない遺構などもあり、必ずしもすべての遺構についてその帰属時期を明らかにすることはできない。以下では、ある程度まとまった遺物が出土して時期の判断が可能な遺構、遺物は少ないと時期的に看過できない遺構、遺構自体の性格から触れる必要があると思われるものについて、遺構とその出土遺物を報告する。

01号遺構（溝状遺構）

A-1区からC-1区にかけてほぼ一直線に検出した溝である。溝の幅は、最も広い部分で58センチ、狭いところで25センチほどであり、検出面からの深さは7.5~14センチを測る。底面の標高は、4.36~4.45メートルで北から南へと緩く下降している。断面はU字型を呈する。

弥生土器の小片が若干出土したにとどまる。Fig.6-1は、甕の口縁部である。小さく外方に張り出して、逆L字型となる。2は、壺の口縁であろうか。小さく「く」字型に外折している。1・2ともに器表は摩滅気味で、調整痕跡は見えない。

弥生時代後期の溝と考えられる。

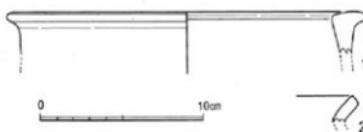


Fig.6 01号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.4 01号遺構 (南東より)



Ph.5 01号遺構断面 C-1区 (南東より)

02号遺構（溝状遺構）

B-1区からB-2区にかけて検出した溝状遺構である。上で述べた01号遺構（溝状遺構）を切っている。溝の幅は、最も広いB-1区東壁付近で40センチ程度を測る。検出面からの深さは、同じく東壁付近で3.4センチ、西に行き次第に浅くなり、B-2区の半ばでほとんど消滅する。

Fig.7に出土遺物を示す。

1は、古式土師器の甕である。口縁部は内外面とも横方向の撫で調整、体部外面は横刷毛調整、内面は横方向に削る。外面にはすが付着している。

2は、弥生土器の甕である。

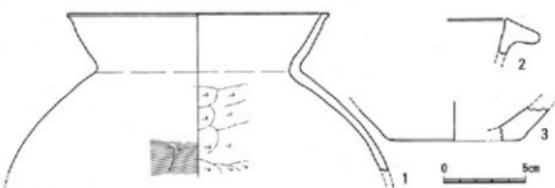
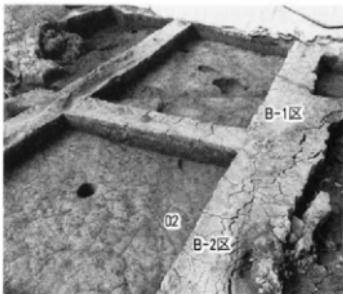


Fig.7 02号遺構出土遺物実測図 (1/3)

口縁は、逆L字型を呈する。3は、底部である。若干丸みを帯びた平底に作る。2・3は、表面が摩滅する。1は混入遺物で、弥生時代中期の溝である。



Ph.6 02号遺構断面 (南西より)



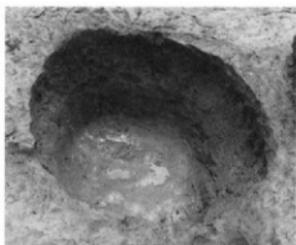
Ph.7 02号遺構 (南より)

04号遺構 (井戸)

B-1区から検出した円形の土坑で、壁が直立して深いことから井戸と考えられる。長軸87センチ、短軸75センチの橢円形を呈し、検出面からの深さは50センチ、底面の標高は、約4.0メートルである。

Fig.8-1・2は、鉢である。1は、外傾した体部から外反気味に丸くおさめた口縁部を作る。内外面とも、撫で調整する。2は、丸みを持った体部からそのまま内傾した口縁部となる。3は、壺の底部である。外面は継刷毛調整、内面は撫でである。4は、壺の底部である。器面は全体に摩滅しているが、外面には部分的に磨きが認められる。

弥生時代前期の井戸であろう。



Ph.8 04号遺構 (北西より)

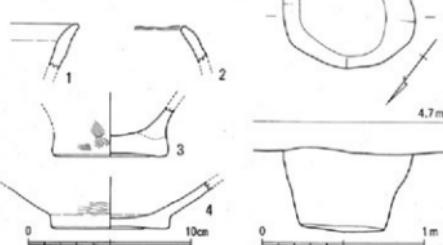


Fig.8 04号遺構出土遺物実測図 (1/30)

Fig.9 04号遺構実測図 (1/30)

19号遺構 (土坑)

A-1区の調査区東壁にかかるて検出した土坑である。壁面の観察より、包含層の上面から掘り込まれたことがわかる。

小判型の平面を呈し、推定長径66センチ、短径42センチ、検出面からの深さ12センチを測る。ただし、この部分での包含層の厚さは35センチほどあるから、その分を加えれば、包含層上面からの深さは47センチとなる。

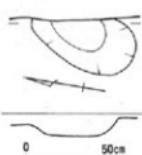


Fig.10
19号遺構実測図 (1/30)



Ph.9 19号遺構断面 (南西より)

出土遺物をFig.11・Ph.10に示す。すべて古式土器である。1は、鉢である。内外面共に密に範磨きする。胎土は肌理細かく精良である。2・3は、壺である。外面には全体にすすぐ付着している。口縁部は横方向の撫で調整、体部外面は刷毛目調整で、内面は窓削りする。2の頸部内面は、指頭圧痕が並ぶ。また、肩部には、櫛描き波状文が施されている。3の体部内面下位には指頭圧痕が見られ、すすぐ付着している。

古墳時代前期の土坑である。



3

Ph.10 19号遺構出土遺物

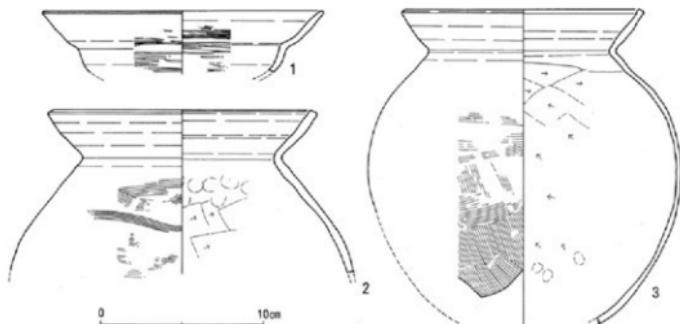


Fig.11 19号遺構出土遺物実測図 (1/3)

22号遺構（井戸）

D-4区から検出した土坑である。ほぼ円形で、壁が直立して深いことから井戸と考えられる。検出した時点では、Fig.12に破線で示したように長径110センチ、短径90センチの梢円形を呈したが、壁が巾着状にオーバーハングしていたため、湧水と雨水の流れ込みで上部は崩落した。検出面から底面までの深さは、約50センチを測る。底面の標高は、3.9メートルである。

弥生土器の小片が、少量出土した。Fig.15-1は、壺の肩部である。器面は全体に摩滅しているが、頭部で横方向の撫で調整が認められる。2は、大型壺の口縁部であろう。内外面共に、横方向に撫で調整する。

弥生時代中期初頭頃の井戸と思われる。



Fig.11 22号遺構 (北より)

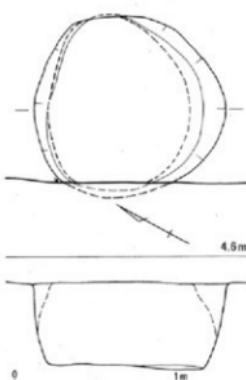


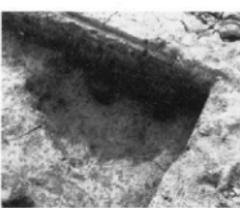
Fig.12 22号遺構実測図 (1/30)

23号遺構（土坑）

B-3区で検出した土坑である。一部遺構の重複を思わせる部分があるが、調査時の所見では埋土等から区別することはできなかった。径75-80センチの不整円を呈し、検出面からの深さは10センチ、深い部分で17センチを測る。

出土遺物をFig.15の3~5に示す。3は、壺の口縁部である。外面は、横方向に撫である。4は、高壺の脚裾であろう。器面は、摩滅している。5は、壺の底部である。摩滅のため、調整痕は見られない。

弥生時代中期の土坑と思われる。



Ph.12 23号遺構（東より）

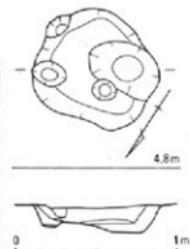


Fig.13 23号遺構実測図 (1/30)

29号遺構（土坑）

C-3区から検出した土坑である。長辺65センチ、短辺50センチの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは25センチを測る。埋土上位で、砾と器台が出土した。

Fig.15-6は壺の口縁部、7は鉢の口縁部、8は壺の底部、9は器台である。いずれも器面は摩滅しており、調整痕はうかがえない。

弥生時代中期の土坑である。

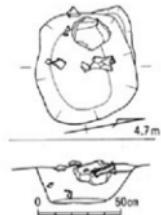


Fig.14 29号遺構実測図 (1/30)



Ph.13 29号遺構（東より）



Ph.14 29号遺構出土遺物

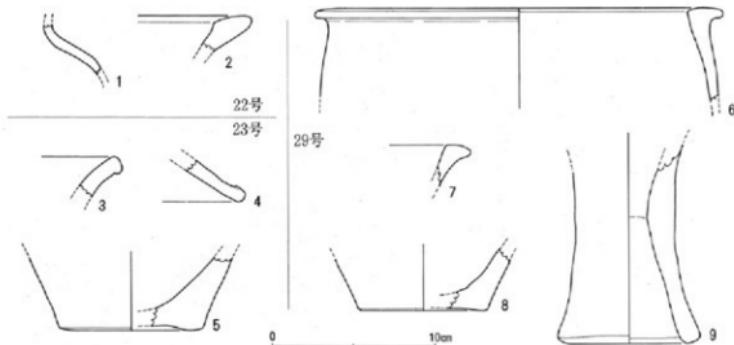


Fig.15 22・23・29号遺構出土遺物実測図 (1/3)

36号遺構（畦畔状遺構）

D-6区の包含層上面において、帯状の高まりを検出した。さらにDの各区のベルトで土層を検討したところ、これが緩く蛇行しながら北東に続いているのを確認した。包含層の第2層が盛り上がった高まりで、上面の幅45~90センチ、高さ8~10センチを測る。粘質土壤の高まりである点からみて、水田の畦畔であろう。

畦畔状高まりの南際の粘質土（包含層1層）の出土遺物を、Fig.16に示す。1は、壺の口縁である。器面は摩滅している。2は、器台の脚部である。外面は摩滅するが、内面には指撫での痕跡が残る。3は、壺の口縁である。外面は横方向の撫で調整で、すすぐが付着している。

古墳時代前期頃の水田に伴う畦と思われる。



Ph.15 36号遺構（北東より）

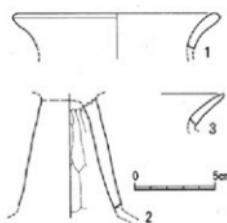
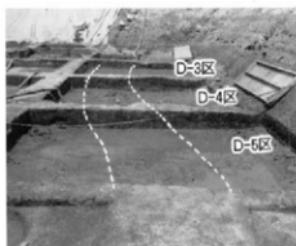


Fig.16 36号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.16 D区36号遺構断面（南西より）

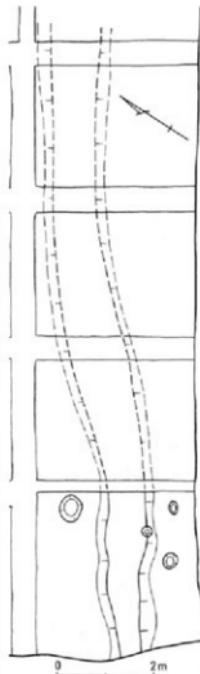


Fig.17 36号遺構実測図 (1/100)

42号遺構（土坑）

B-5区の南角で検出した浅い土坑である。調査区のベルトにかかっていたが、ベルトを除去した段階では若干干掘りすぎたものと見え、この続きを検出することはできなかった。推定で長軸100センチ、短軸60センチほどの不整形をとるもので、検出面からの深さは10センチ前後を測るに過ぎない。

弥生土器片が若干出土している。Fig.19-1は、

壺の口縁部である。逆L字型に作る。2は、壺の底部である。平底である。ともに器面は摩滅し、調整痕は残っていない。

弥生時代中期の土坑と考えられる。

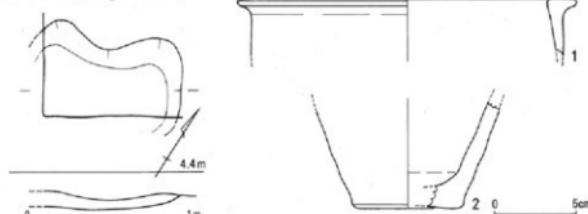


Fig.18 42号遺構実測図 (1/30)

Fig.19 42号遺構出土遺物実測図 (1/3)

43号遺構（土坑）

B-5区からA-5区にまたがって検出した土坑である。検出面自体が粗砂質に変わっており、湧水が見られたため、土坑の肩はしばしば崩れ、特に東辺においてやや不確実になっている。おおむね、長辺210センチ、短辺75センチほどの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは15センチを測る。底面は、ほぼ水平で平坦である。

埋土中から、土器片が出土した。いずれも底面からは6~8センチ浮いている。南西隅近くから丹塗りの鉢(Fig.21-14)、そのすぐ北から壺底部(22)と口縁部(3)、土坑中程から壺(1)と丹塗り壺底部(18)、北よりから壺(2)が出土しているが、特に規則性は感じられない。

出土遺物をFig.21、Ph.18に示す。1~9は、壺である。1は、丸みを持ちつつ開いた深い体部から内折し、外反気味に直立てて口縁部を作る。口縁端部と屈折部に刻み目突帯を貼り付ける。口縁部の突帯は、口縁端部からわずかに下がった位置に付く。外面は条痕、内面は横方向に撫で調整する。外面にはすが付着し、火熱のためか体部下位の表面が薄く剥落している。2は、直線的に開く体部を持つ。刻み目突帯は、口縁部から下がった位置に付けられている。外面は条痕、内面は板状工具による撫で調整である。3~5・7は、外反気味に直立てする口縁部破片で、1と同様に内折した体部を持つものと推定される。いずれも、口縁端部に刻み目突帯を貼り付ける。4・5は、幅の薄い鋭い工具で、深い刻みを入れる。3・5の外面は板撫で、4・7は条痕である。3~5の内面は板撫で、7は条痕となる。6は、やや丸みを帯びた体部を持つ。刻み目突帯は、口縁端部に貼り付く。外面は条痕、内面は撫である。8は、内折部から頸部の破片である。内外面とも条痕が見られる。9は、内折部の破片であるが、突帯は付かず、直接鋭い工具による縱長の刻みが施される。平滑な撫で調整で、屈折部分から下位には、荒磨き状の調整痕が認められる。

10~13は、壺である。10は大型壺の口縁部で、口縁下端は折り返し気味に段が

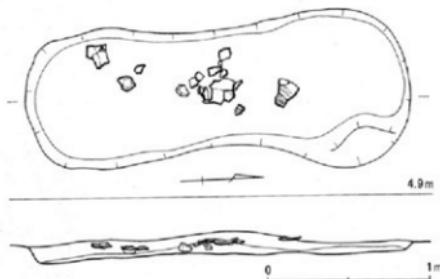


Fig.20 43号遺構実測図 (1/30)



Ph.17 43号遺構 (1) 北東より (2) 南東より



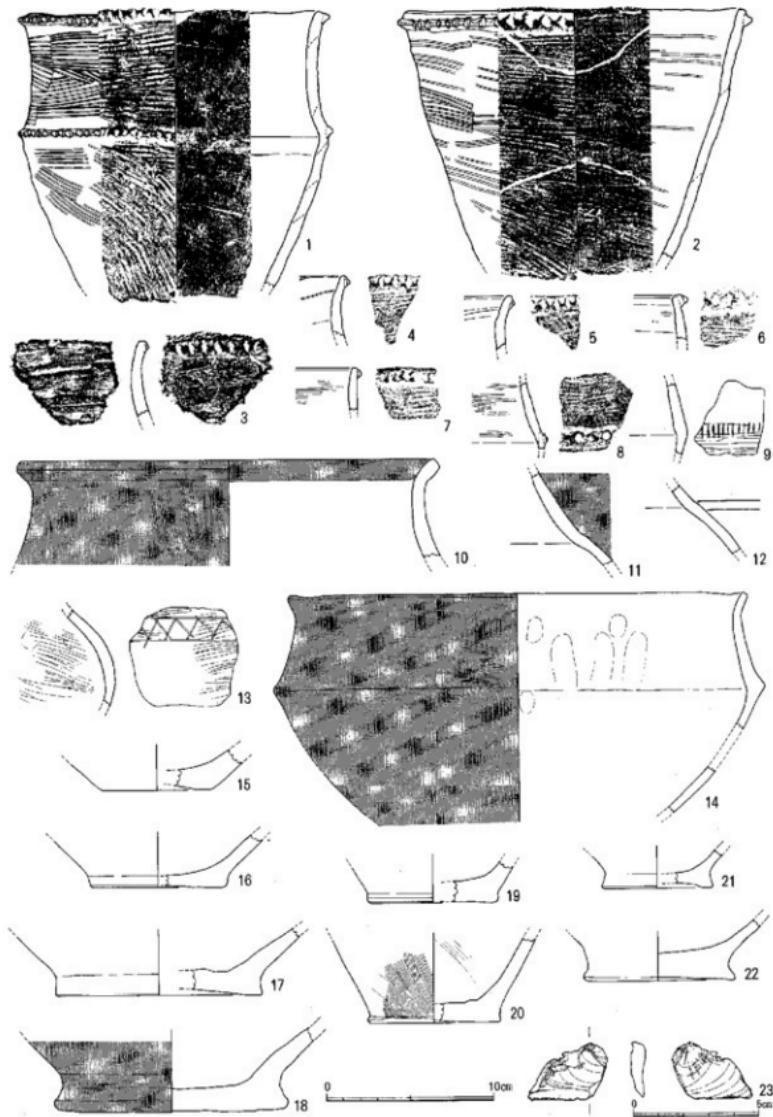


Fig.21 43号遺構出土遺物実測図 (1~22…1/3, 23…1/2)

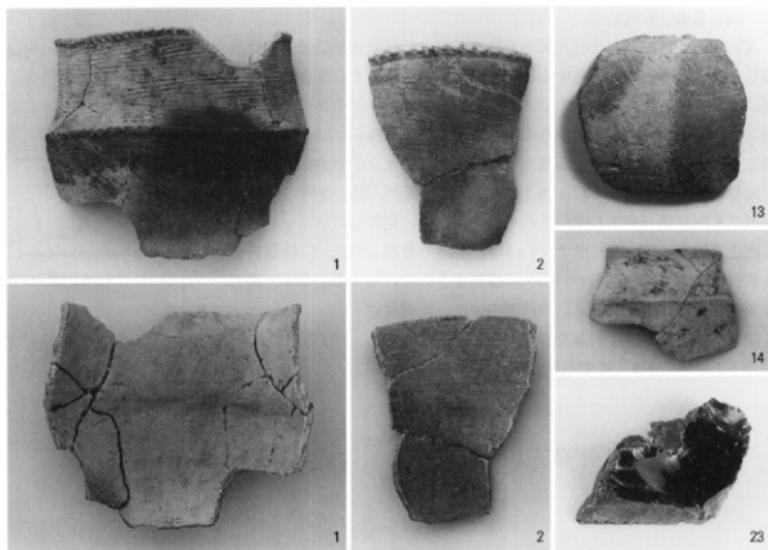
付く。内面は撫で調整で、外面には綫方向の暗文が並ぶ。口縁上面から外面には、丹が塗られている。11は、大型壺の肩部である。頸部の付け根には段が付く。外面は範磨きで、丹塗りである。12も壺の肩部である。外面は範磨きで、体部から頸部の転換部分には二条の沈線が横走する。内面は撫で調整である。13は、壺の体部である。外面は範磨きで、二条の沈線の間に指壓文を刻む。内面は、指押さえの上に範磨きする。

14は、鉢である。内寄して開いた体部から内折し、やや内傾気味に直立した頸部から小さく外反して口縁部となる。全体的に器面が摩滅しており調整痕は見にくいが、外面は口縁部で横方向の撫で、頸部から体部は範磨き、内面は撫でで、頸部に綫方向の指撫で痕が並ぶ。外面の内面の一部に、丹塗りが残っている。

15～22は、底部である。15～18・21・22は、壺であろう。15は、内外面とも摩減する。16は、内外とも範磨き、底部外面は削りである。17の器面も摩減しているが、底部の際には指押さえ痕跡が薄く認められる。18は、丹塗りの大型壺である。内面は摩減、外面は撫で調整する。21の内面は摩減しているが、外面は範磨きで、黒色を呈する。黒色磨研の小型壺である。22の内面は撫で調整、外面は綫に撫で上げる。外底部は、削りである。19・20は、甕の底部であろう。19は、内外面とも摩減しているが、底部の際には指押さえの痕跡がわずかに認められる。20の外面は綫方向の刷毛目、内面は撫で上げである。

23は、黒曜石の剥片である。小口は、風化した剥離面であり、素材面をとどめている。下端の直線的な辺には、ごく小さな刃こぼれ状の剥離が並んでおり、使用痕の可能性もある。

縄文時代晩期終末の土坑である。



Ph.18 43号遺構出土遺物

50号遺構（柱穴）

A - 6 区から検出した円形の小土坑である。柱穴であろう。直径26センチの円形を呈し、検出面からの深さは25センチを測る。

出土遺物をFig.23に示す。1・2は、壺である。1は、口縁である。器面は摩滅しているが、横方向の範磨きと思われる。2は、小型壺の肩部である。外面は範磨きで、わずかに黒色顔料が見え、彩文があったものと知れる。内面の上端は上から撫でつけた痕跡があり、屈曲部には薄く刷毛目状の痕跡が見える。3～5は、壺の口縁部である。外面は条痕、内面は3は撫で、4は条痕である。

縄文時代晩期終末の柱穴である。

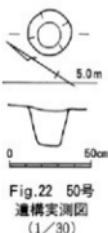


Fig.22 50号
遺構実測図
(1/30)

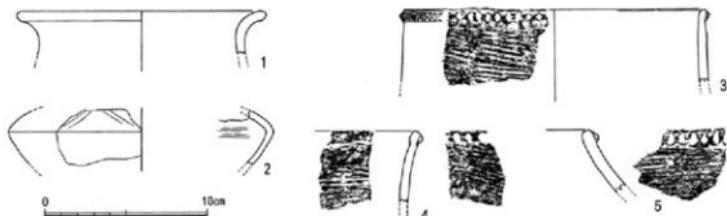


Fig.23 50号遺構出土遺物実測図 (1/30)

52・53号遺構（柱穴）

A - 6 区から検出した柱穴状の土坑である。52号遺構と53号遺構は隣接した遺構であるが、後述する高坏がそれぞれから出土し接合できたので、両者併せて報告するものである。52号遺構は長径60センチ、短径52センチの楕円形で、検出面からの深さは23センチを測る。53号遺構は、同じく52センチ、40センチの楕円形で、深さは33センチである。

52号遺構の埋土中からFig.25-2の高坏の坏底部が、53号遺構の底部から同じく坏体部が出土した。それぞれの部位は、完存している。

出土遺物を、Fig.25に示す。1・2は、高坏である。1は、口縁部外面を横撫でする以外は、細かい単位の横範磨きを密に加える。2は、脚部を欠くが、坏部は完存する。口縁部内面は、沈線状にくぼむ。横方向の撫で調整を行うが、部分的に刷毛目が残っている。3は、鉢である。口縁外面は横撫で、

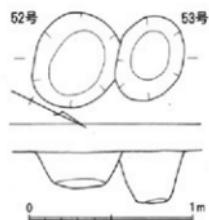
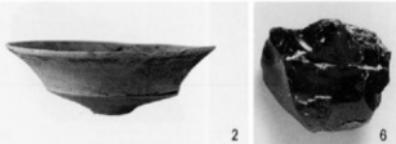


Fig.24 52・53号遺構実測図 (1/30)



Ph.19 52・53号遺構出土遺物



Ph.20 52号遺構 (北より)

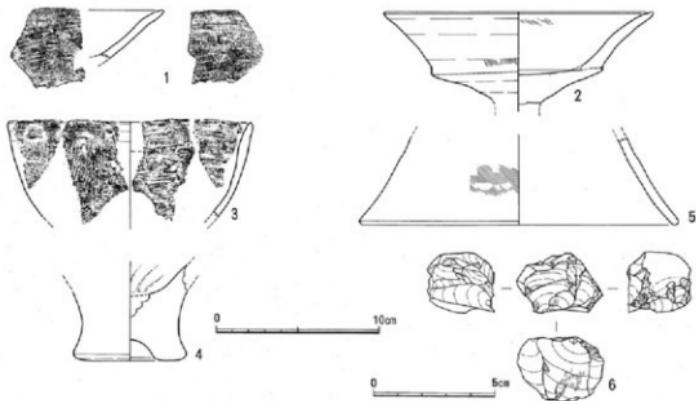


Fig.25 52-53号遺構出土遺物実測図 (1~5…1/3, 6…1/2)

体部外面は縦の刷毛目調整、内面は粗い横方向の撫で調整で、工具を用いた条痕状の撫でも見られる。4は、壺の底部である。器面は摩滅している。5は、高坏の脚であろうか。横撫で調整で、部分的に薄く刷毛目が残っている。6は、黒曜石の石核である。一部に風化した剥離面である原石面をとどめている。

4~6は、弥生時代の遺物であるが、他の遺物から古墳時代前期の遺構と知れる。

55号遺構（土坑）

A~6区の北壁際で検出した土坑である。

Fig.43-14の鉢型土器が出土し、縄文時代晩期末の遺構と思われる。

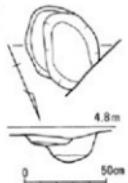
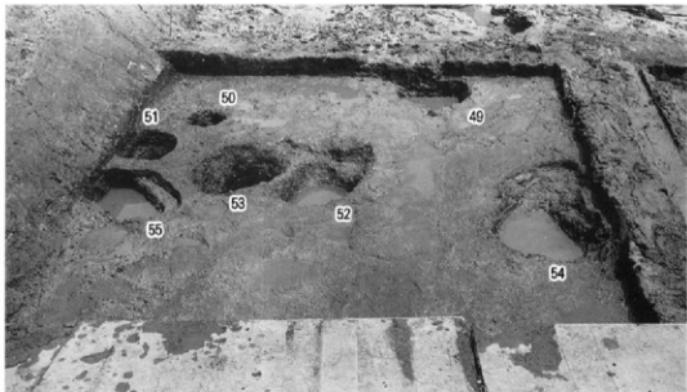


Fig.26 55号
遺構実測図 (1/30)



Ph.21 A-6区遺構分布状況（南西より）

56号遺構（土坑）

B-6区から検出した土坑である。長軸98センチ、短軸84センチの卵形を呈し、検出面からの深さは12センチを測る。

出土遺物をFig.28に示す。1は、大型壺の口縁である。全体に摩滅が激しいが、わずかに丹塗りが認められる。2も、壺である。頸部から口縁部にかけての破片で、器面は全体に摩滅気味である。口縁部の下に二条の沈線が巡るが、上の沈線は遺存状態が悪く、部分的にしか追えない。3は、壺の底部である。器面は摩滅しているが、外面には薄く縦方向の刷毛目調整が残っている。

弥生時代前期の土坑であろう。

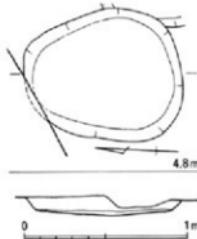


Fig.27 56号遺構実測図 (1/30)

58号遺構（土坑）

B-6区の東隅で検出した土坑である。グリッドの畦にかかるが、極めて浅い土坑であるためか、畦を除去した段階でこの続きを確認することができなかった。おそらく、畦の幅の内でおさまる、略円形の土坑であろう。検出面からの深さは、深い箇所でも4センチを測るに過ぎない。

出土遺物をFig.30に図示する。1は、壺である。口縁は前後に張り出して、鋤先状となる。内面か

ら口縁部上面は、摩滅し、調整痕が見えない。外面は、口縁部下で横撫で、頸部は刷毛目の上に縦の暗文を配する。2~4は、壺の口縁である。2・3は、口縁部に厚い粘土紐を貼り付け、断面三角形の突帯とする。4は、逆L字形の口縁を作る。内面は撫で調整する。5~7は、壺の底部である。6・7は、上げ底に作る。6の外面は縦刷毛調整、内面は撫で調整する。

5は、縄文時代晩期の混入遺物と見られ、弥生時代中期の土坑であろう。

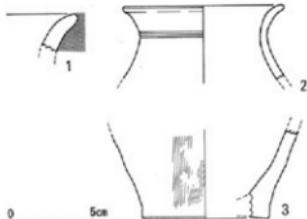


Fig.28 56号遺構出土遺物実測図 (1/30)

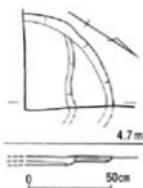
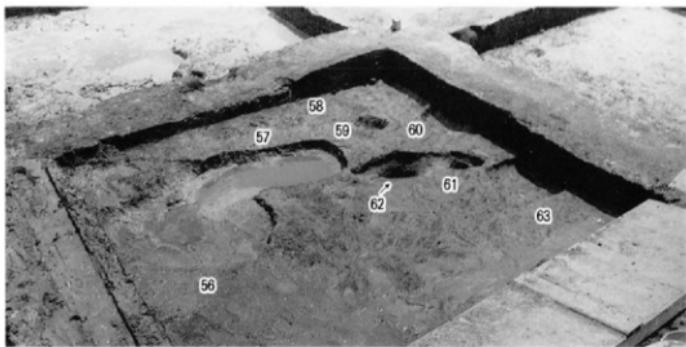


Fig.29 58号遺構実測図 (1/30) ▶



Ph.22 B-6区遺構分布状況 (南西より)

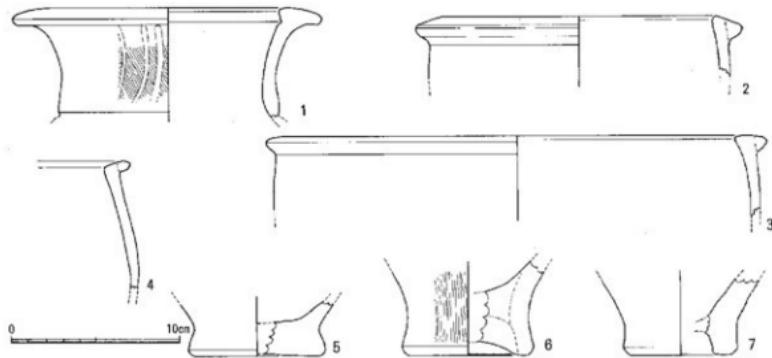


Fig. 30 58号遺構出土遺物実測図（1/3）

60号遺構（土坑）

B-6区から検出した土坑である。長径60センチ、短径50センチの楕円形を呈し、検出面からの深さは約10センチを測る。

出土遺物をFig.32に示す。1~4は、壺である。いずれも口縁は外方に水平に張り出し、逆L字形を呈する。3の口縁部やや下には、断面三角形の突帯が巡る。器面は摩滅しているが、1の口縁部直下には薄く縱方向の刷毛目があり、3の口縁部下面から突帯直下にかけては横撫で調整が認められる。また、2の口縁部直下には、すが付着している。5は、壺の底部である。わずかに上げ底気味の平底に作る。器面は摩滅し、調整痕は残っていない。

弥生時代中期の土坑である。

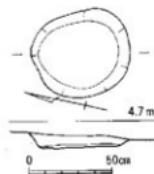


Fig. 31 60号遺構
実測図（1/30）

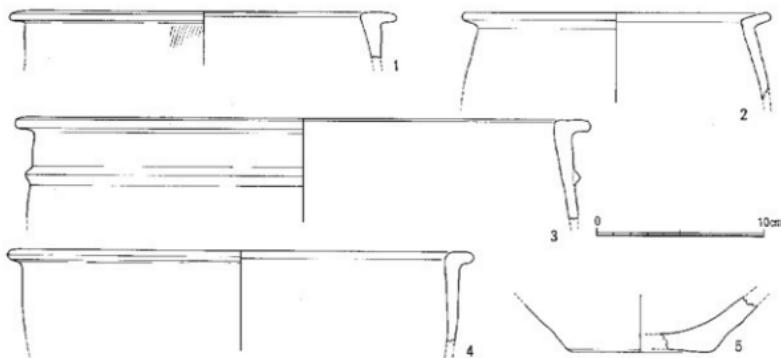


Fig. 32 60号遺構出土遺物実測図（1/3）

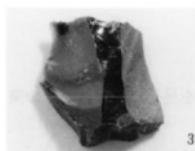
71号遺構（土坑）

C-5区からC-6区にまたがって検出された土坑である。長軸80センチ、短軸57センチの小判形を呈し、検出面からの深さは18センチを測る。東側の壁の立ち上がりが、屈曲して傾斜を緩めるが、調査時の所見では、切り合い等の遺構の重複を想定する要素は認められなかった。

出土遺物をFig.34に示す。1は、大型壺の底部である。内外面ともに摩滅しているが、底部直上には指押さえ痕が並び、刷毛目の痕跡もうかがわれる。2は、壺の底部である。器面は摩滅している。

3は、黒曜石の割片である。上下の小口には風化した素材面をとどめる。鋭い両側縁には、刃こぼれ状の細かい剥離が並んでおり、使用痕の可能性が考えられる。

弥生時代中期の土坑である。



Ph.23 71号遺構出土遺物

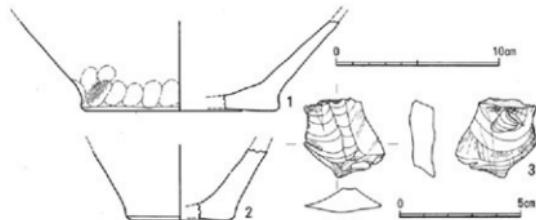


Fig.34 71号遺構出土遺物実測図 (1・2…1/3, 3…1/2)

76号遺構（柱穴）

B-6区の北隅で検出した柱穴である。直径約40センチの略円形を呈し、検出面からの深さは26センチを測る。

柱穴の中央に柱材が残っていた。朽ちたためか、幅13センチ、厚さ5センチの板状を呈している。柱根は、柱穴の基底面に密着しており、高さ18センチ分が直立していた。Fig.5の遺構配置図中に実線で示したように、B-5区・C-5区の柱穴と組合わさる可能性があるが、建物としてはまとまらない。

弥生時代中期初頭の甕片が出土しているが、図示できなかった。

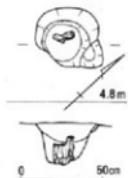
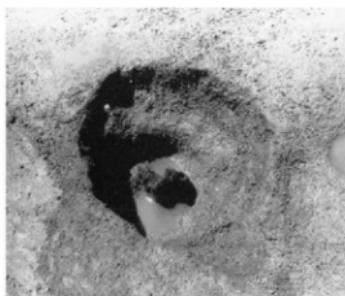


Fig.35 76号遺構
実測図 (1/2)



Ph.24 76号遺構（東より）



Ph.25 76号遺構柱根（東より）

77号遺構（土坑）

B-6区から検出した土坑である。直径約60センチの略円形を呈し、検出面からの深さは20センチ前後を測る。

若干の土器片が出土した。Fig.36-1は、高坏の体部片である。器面は摩滅しているが、底部外面には薄く縱方向の刷毛目調整が残る。2は、壺の底部である。器面は摩滅し、調整痕は認められない。

弥生時代中期の土坑である。

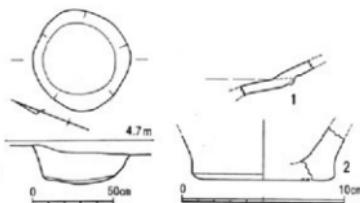


Fig. 36 77号遺構・出土遺物実測図 (1/30)・(1/8)

83号遺構（柱穴）

C-6区から検出した小土坑である。長径29センチ、短径23センチの梢円形を呈し、検出面からの深さは7センチを測る。遺構の規模に対し、後述する土器片は大きく、柱が立ち上がる余地は少ないため、柱穴とする事に若干の疑問も残る。柱痕跡等は確認できなかった。

出土遺物をFig.38に示す。すべて壺の破片である。1は、刻み目突帯を持つ。口縁部の突帯は、口縁上端から若干下がった位置に貼り付く。外面は横方向の条痕、内面は撫で調整する。外面には、すすぐが付着している。2は、壺体部の屈曲部であるが、擬口縁状となる。屈曲部外面に刻み目を入れる。撫で調整する。3は、厚い粘土帯を貼り付け三角形に肥厚させた口縁端部

に、浅い刻み目を並べる。器面は、摩滅している。

弥生時代前期の、柱穴状の小土坑である。

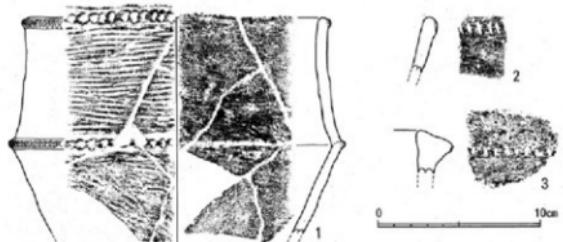


Fig. 37 83号遺構実測図 (1/15)

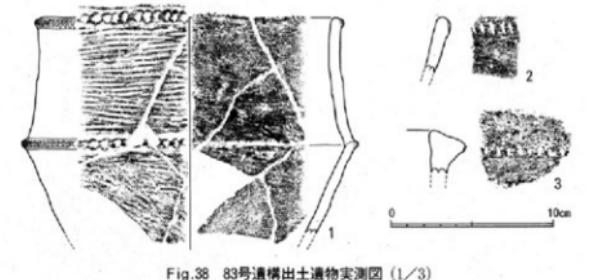
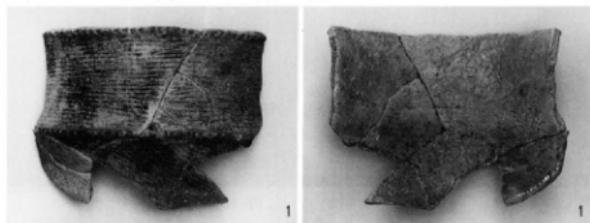


Fig. 38 83号遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 26 83号遺構出土遺物

86号遺構（土坑）

A - 4 区から検出した土坑である。最初、11号遺構として南端側の落ちを調査したが、遺物がまとまって出土したことから、調査区壁を拡大して掘り込み、あらためて86号遺構として検出したものである。実測図的には異なる遺構の切り合いのように見えるが、写真に示すように実際にはそれほど明瞭に区別し得るものではない。また、出土遺物からみても両者を峻別できるほどの差異はなく、とりあえず一連の遺構として報告するものである。なお、土坑の北端付近については、調査区を拡大したため、壁面の傾斜が急になり、これ以上拡大すると崩落する可能性も考えられたので、調査を断念した。

検出した範囲で、長辺130センチ以上、短辺90センチ程度の長方形を呈する。底面は平坦ではなく、凹凸が激しい。最も深いところで、検出面からの深さは45センチを測る。

土坑の底面から若干浮いた状態で、土器片が出土した。全体的に埋土中からは土器片が出土したが、大きな破片がまとまって出土したのは、土坑の西壁寄りと、調査区壁面付近の二ヶ所である(Ph.27)。この内、西壁寄りの土器は甕の破片であり、土圧で押し潰されたような状況である。ただし、底部片はともなっていなかった(Ph.27-(3))。こ

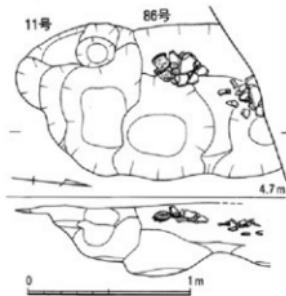
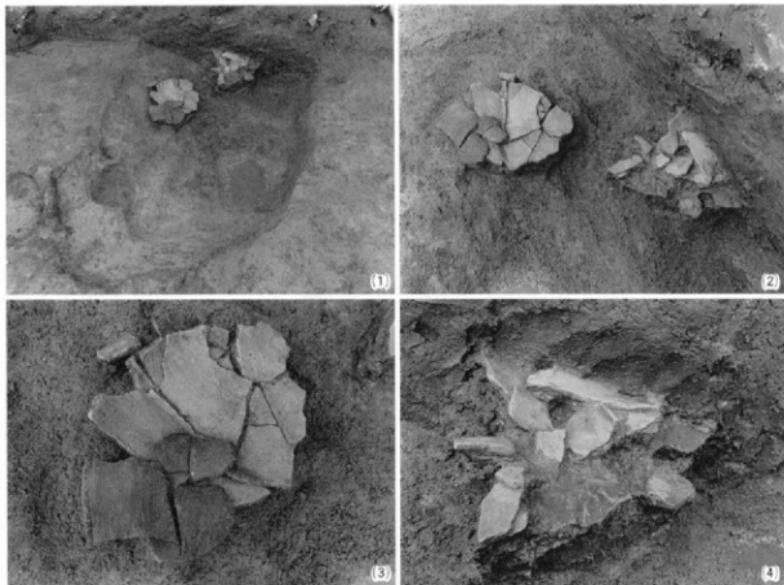


Fig. 39 86号遺構実測図 (1/30)



Ph.27 86号遺構

- (1) 全景(南より)
- (2) 遺物出土状況(北東より)
- (3) 瓢出土状況(東より)
- (4) 瓢出土状況(南東より)

れに対し、調査区壁にかかった土器は、壺片などがばらばらに集まっており、最初から破片化していたものと考えられる。

出土遺物をFig.40・41、Ph.28に示す。1は、大型壺である。調査区壁面にかかって出土したもので、埋土中からばらばらに出土した破片と合わせて、口縁部は全周分が残っていた。頸部から口縁部にかけて次第に厚さを増し、小さく外側にひねりだして、口縁とする。内面は撫で調整、外面は横方向の密な範磨きである。口縁部内面から外面には、丹塗りを行う。

2～7は、鉢である。2・3は、小さく内折した口縁部を持つもので、内外面とも範磨きされる。3の内折部の内面には、横方向の条痕が見られる。4～6は、口縁の外端部に刻み目を持つものである。4の刻み目は、薄い板状の工具で鋭く刻まれている。内面は摩滅しているが、外面には縦の刷毛目が残る。5の口縁端部は、強く平坦に面取りされ、前後にわずかに張り出す。口縁部の内面は条痕、体部内面は撫で、外面の体部から口縁部にかけては目の細かい刷毛目調整で、体部の条痕にかぶさっている。6も板状工具の角を用いた、鋭い刻み目を持つ。内面から口縁部外面は撫で調整、体部外面は刷毛目調整である。1の壺破片に混じって、調査区壁際の土器群中から出土した。7は、体部から内折した口縁部であろう。器面は摩滅し、調整痕は残っていない。

8～14は、壺である。8～10は、直線的に開く体部から内折して口縁部にいたるものである。8・9は、内折した後は真上に直立するが、10は直線的に内傾している。いずれも、口縁端部からやや下

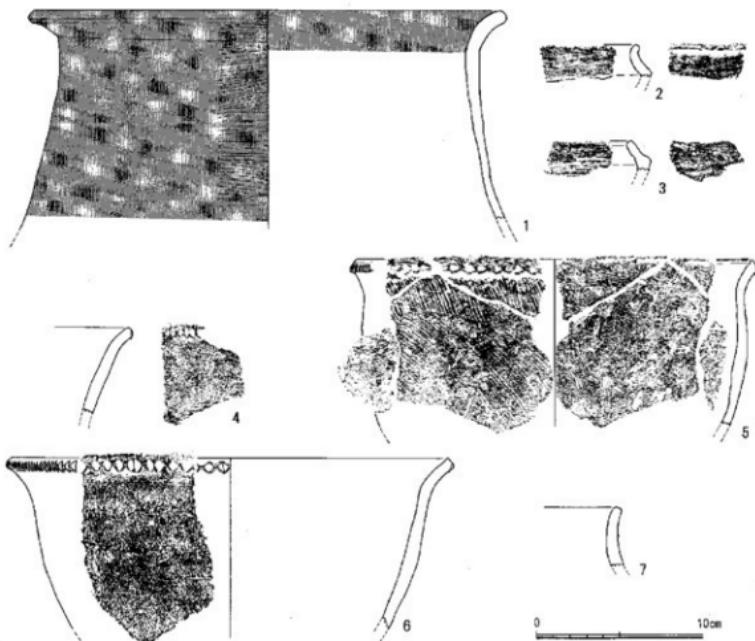
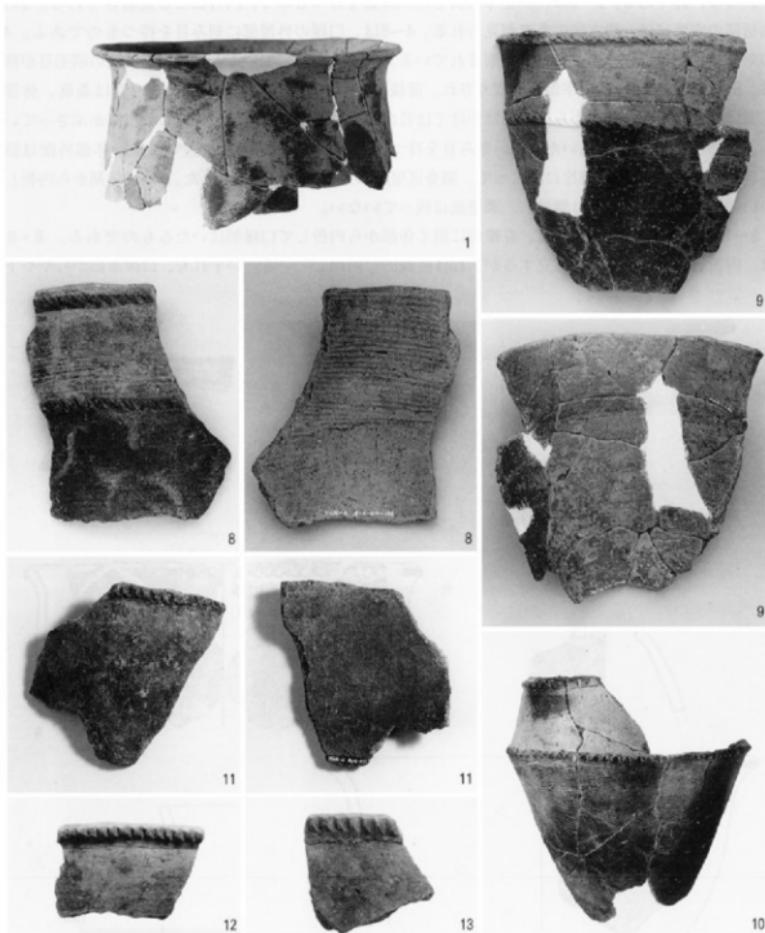


Fig.40 86号遺構出土遺物実測図1 (1/3)

がった位置と、体部の屈折部に刻み目突帯が巡る。外面は横方向の条痕、内面も横方向の条痕で、10の内面には削り調整も加えられている。10は、土坑西壁近くから潰れた状態で出土した土器である。11は、口縁部のみに一条の刻み目突帯が付くものである。突帯は、口縁部からわずかに下がって貼り付けられる。外面は、撫で調整で薄くすすぐ付着する。内面は撫で上げる。12・13も破片の傾きからみれば、口縁端部にのみ刻み目突帯が巡るものと思われる。突帯は口縁端部からやや下がった位置に付く。12の外面は条痕、内面は横方向の撫で調整で、外面にはすすぐ付着している。13は、内外面と



Ph.28 88号遺構出土遺物

も撫で調整で、外面にはやはりすが付着する。14は、体部の内折部分の破片で、刻み目突帯が貼り付く。内外面とも、条痕が認められる。

15・16は、底部である。15は、平底となる。内面は撫で調整、外面は縦方向の刷毛目で、底部近くには指押さえの痕跡が認められる。5・6などの刷毛目調整を行う鉢形土器の底部にならうか。16は、上げ底に作る。内面は撫で、外面も撫であるが、体部下位で条痕が見られる。外底部は、丸く削っている。壺の底部であろう。

これらの土器の内、2・3・5・7・11・12・13・14・15は、11号遺構調査時に出土した遺物である。縄文時代晩期末頃の上坑と考えられる。

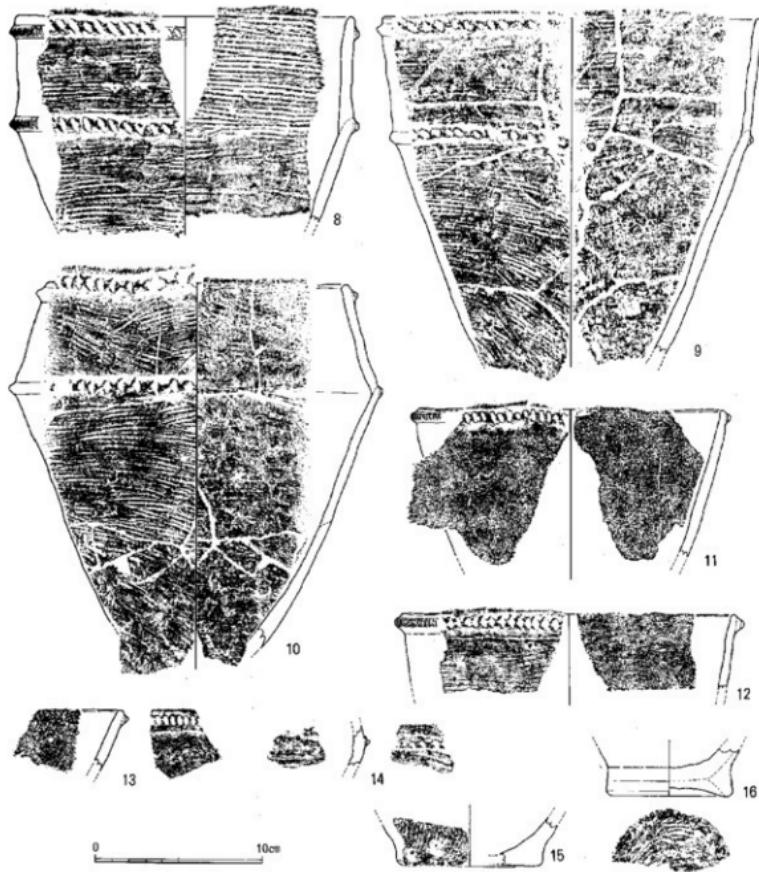


Fig.41 86号遺構出土遺物実測図 2 (1/3)

1号掘立柱建物跡

今回の調査では、一棟の掘立柱建物跡を推定することができた。

A-2・3区、B-3・4区の柱穴からなるものである。一間×二間の規模を持ち、桁方向をほぼ南北に取る。南西角の柱穴（34号遺構）から弥生土器（中期？）の壺底部小片が出土しており、弥生時代の建物跡と思われる。

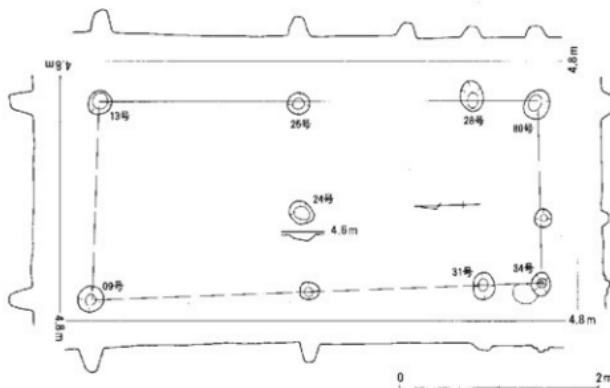


Fig.42 1号掘立柱建物跡実測図 (1/50)

5. その他の出土遺物

次に包含層出土遺物を中心に、これまでの記述から漏れた遺物の一部を報告する。

縄文時代土器

縄文時代晩期の土器を、Fig.43・44、Ph.29・30に示す。すべて夜臼式の範疇に含まれる。

1~7は、壺である。1は小型壺で、口縁部外面は横撫で、頸部は蒐磨きする。2は頸部の付け根に二条の沈線、胴部中央に一条の沈線を巡らし、さらに頸部にも二本単位の山形沈線文を刻む。胴部上半にはかすかに黒く線が引かれているのがうかがえ、彩文があったものと思われる。口縁部内面は横篦磨き、頸部から体部の内面は条痕、外面は密に横篦磨きする。3は、黒色磨研土器である。4・5は、丹塗りの大型壺である。5の口縁内面と外面には刷毛目がみられ、口縁部下に浅い沈線が巡る。6は、肩の張りが強く、逆に頸部は縮まらないまま直立する。7は、壺の底部であろう。内面は平滑に撫で調整、外面は蒐磨きする。

8~19は、鉢である。口縁は、内折した後大きく外反する。10の口縁は、外反せず、受け口状に短くおさまっており、あるいはもう少し古い時期の深鉢の口縁部の可能性も考えられる。8~13、15~18は、黒色磨研土器である。9・11・13・15・16・19などでは器面は摩滅し調整痕が残っていないが、他の遺物を見ると内外面ともに篦磨きを密に加えている。

20~35は、壺である。20~23・25・26は口縁端部に、24・27・28は、口縁端部のやや下に刻み目突

帶を貼り付ける。24は低平な突帯で、範状工具による刻みは、突帯よりも深く刻まれている。26の刻み目は、指頭によるものと思われ、縦長の楕円形の刻みの中央に一本のわずかな高まりが走っている。

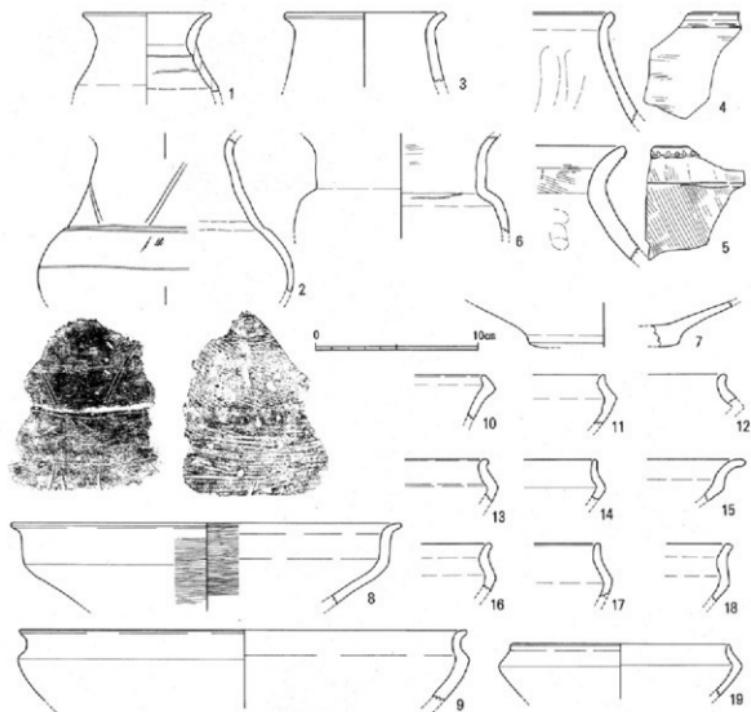
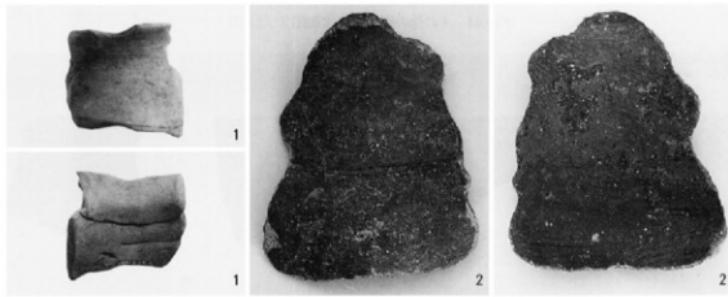


Fig.43 その他の出土遺物実測図 1 (1/3)



Ph.29 その他の出土遺物 1

31～35は、底部である。33の外底部には木葉痕が、34には条痕工具による削り痕が、35には範状工具による削り痕が認められる。

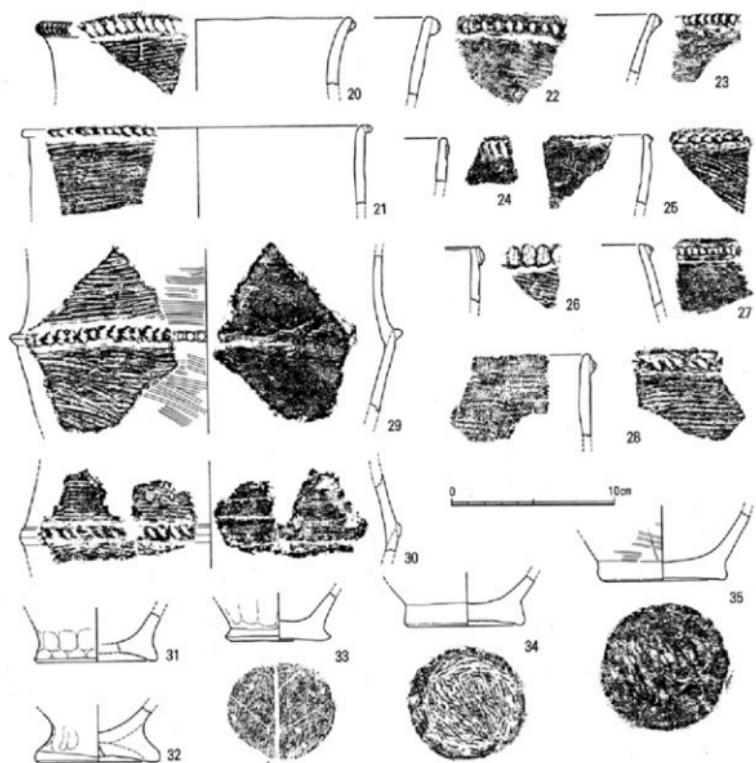
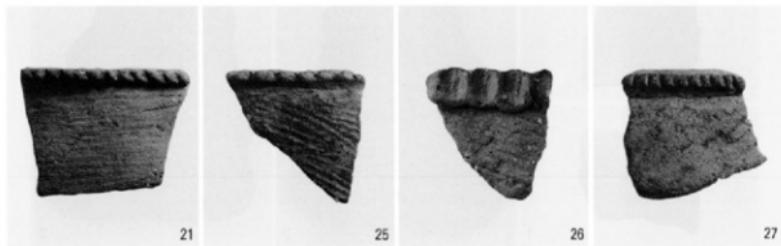


Fig.44 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)



Ph.30 その他の出土遺物 2

弥生時代土器

Fig.45-36~46は、壺である。36は、板付I式土器である。37は、頸部の付け根付近の小片である。両面から穿孔されている。38~40は肩部の破片で、沈線文を持つ。39の沈線は、二枚貝の腹縁を押しつけたものである。41は、外反気味に立ち上がる頸部から小さく外方にひねりだして口縁部を作る。頸部の付け根には、小さな突帯が巡る。42は、丸みを持った肩部から頸部にかけての破片で、肩部には沈線で羽状文を配する。43は、頸部の付け根の突帯の上面に、刻み目を並べる。肩部には縦方向の刷毛目が薄く残っている。44は、短く直立した頸部片である。突帯の上面は工具によって面取りがなされ沈線状のくぼみが横走する。頸部には、わずかに縦刷毛目が見られる。45・46は高く直立した頸部を持つ。45の突帯の上面と側面には、刃状工具による細い刻み目が並ぶ。46は、頸部の付け根に長

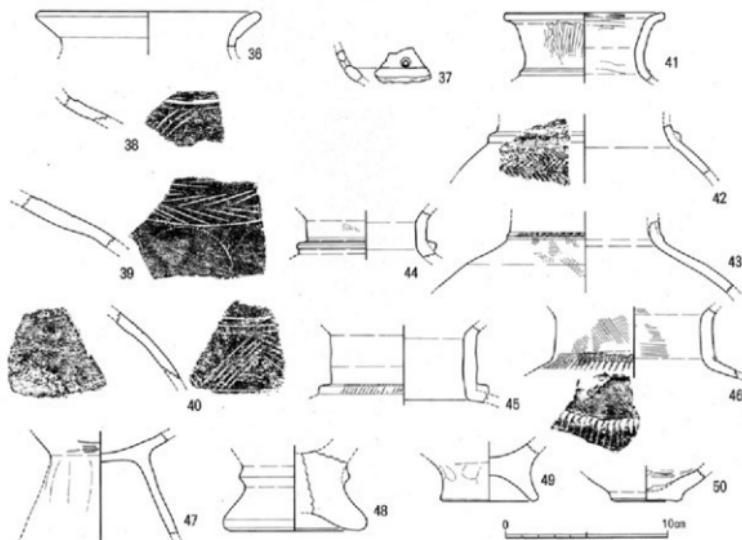


Fig.45 その他の出土遺物実測図 3 (1/3)



Ph.31 その他の出土遺物 3

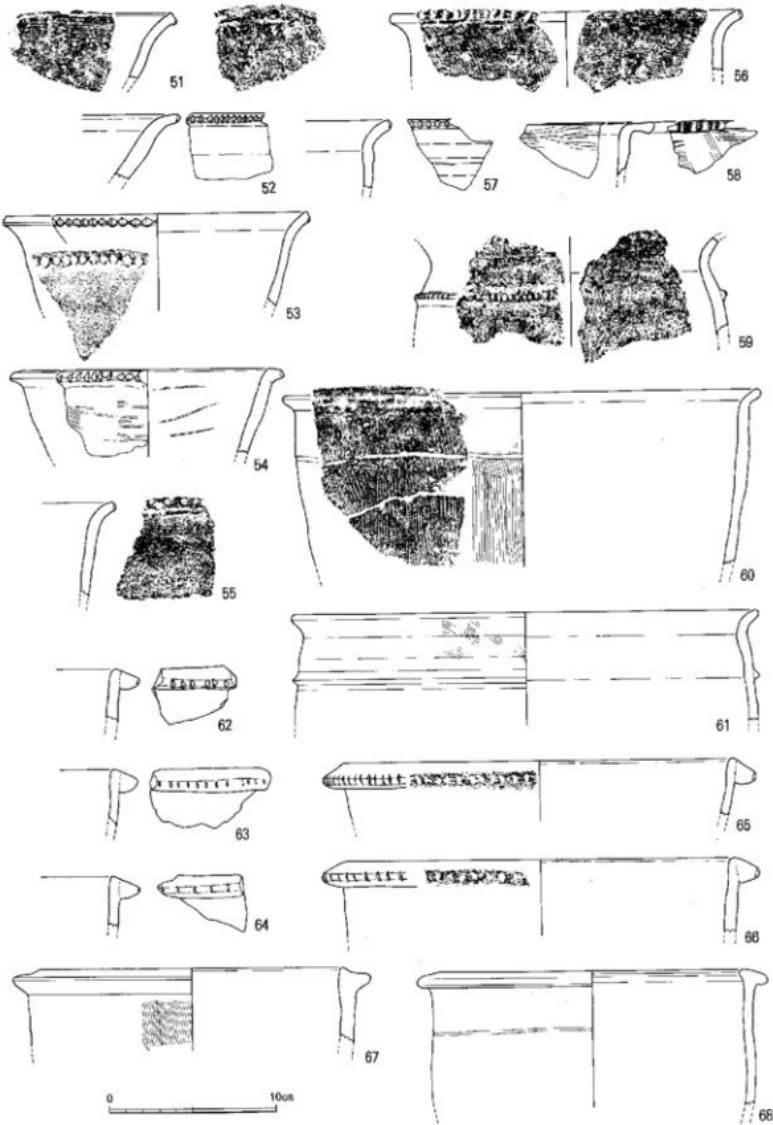
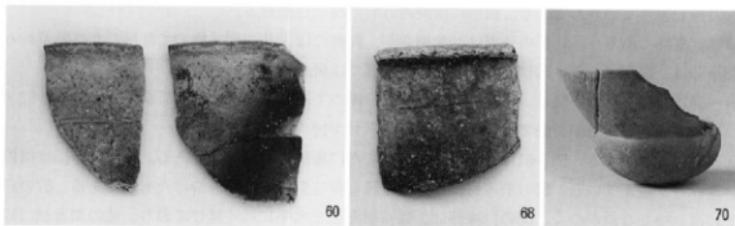


Fig.46 その他の出土遺物実測図 4 (1/3)



Ph.32 その他の出土遺物 4

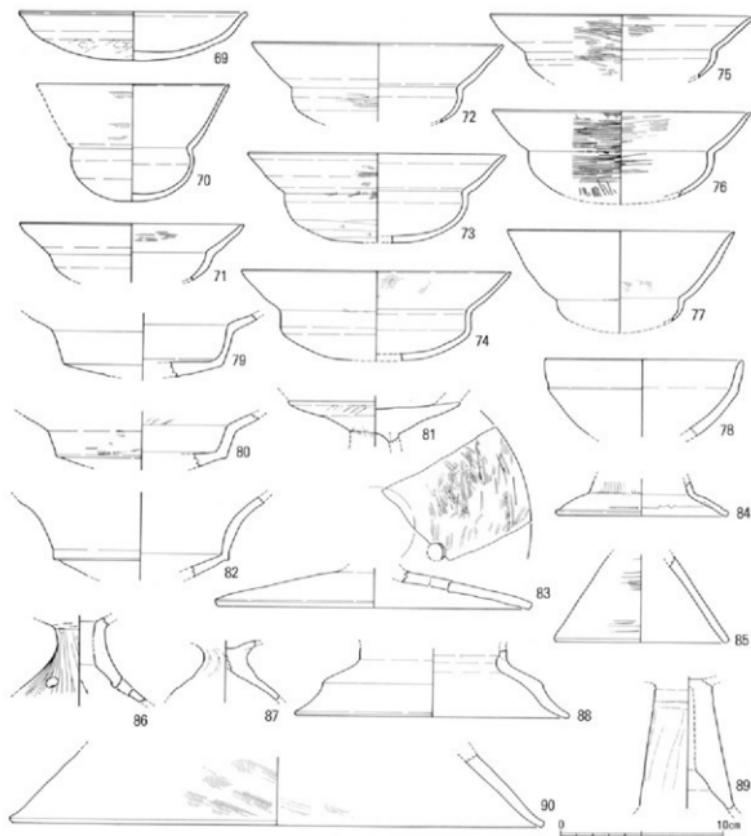


Fig.47 その他の出土遺物実測図 5 (1/3)

方形の押し引き文が並んでいる。頸部には斜め方向の刷毛目が残る。

47は、高坏であろう。坏部の外面には範磨きが、脚部には工具で縦に撫でて整形した痕跡が残る。

48~50は、底部である。50は壺の底部で、内底部には炭化した付着物がこびり付いている。

51~54は、鉢である。51は、平坦に面取りした口縁の下端に、小さな刻み目が並んでいる。52・54は、口縁端面に刻み目が、53では口縁部下端に刻み目が付く。

55~68は、甕である。55~61は、如意状に外反した口縁部を持つものである。55~58の口縁端面には、刻み目が並んでいる。56の刻み目は、貝殻腹縁を押し引き状に刻みつけたものである。57の口縁部下には、小さな段がつく。58の口縁部は、強く屈曲して水平に近く延びており、他の如意状口縁とは異なる。時期的に後出するものであろう。59は、口縁端部を欠くが、このままおさめるものと見て大過なかろう。胴部はやや丸く張り、頸部には刻み目突帯が巡る。60・61の口縁部には、刻み目が付かない。60の口縁部下には一条の沈線が巡り、これから上では刷毛目を撫で消している。61の口縁部やや下には、断面三角形の突帯が一条巡っている。62~66の口縁部には、厚い粘土帯を貼り付け、上面は平坦、下面はやや垂れ気味に膨らんだ三角形に撫で整え、その頂部に小さな刻み目を並べる。器面は撫で調整で、刷毛目痕が見られる破片はない。67も、口縁に厚い粘土紐を断面三角形に巡らせる。外面は綱刷毛、突帯から内面は撫で調整する。68の口縁は、粘土紐を貼り付けて内外に張り出し、断面T字形を作る。肩部には、一条の沈線が巡る。沈線から上は横撫で調整、下は縦方向に撫で状の擦過痕が認められる。

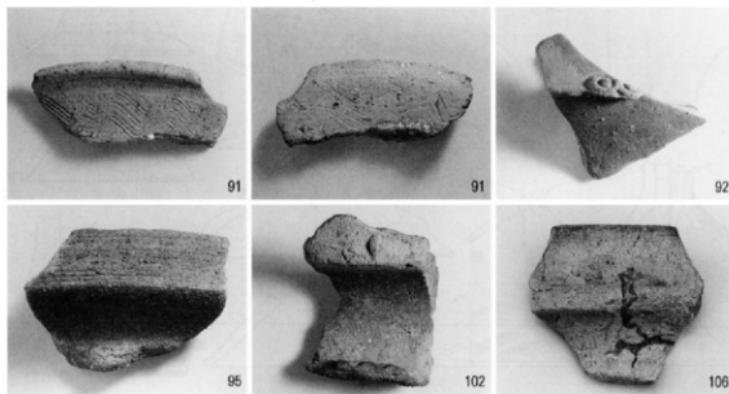
古墳時代前期土器

Fig.47-69は、碗である。器面は摩滅しているが、平滑に整えられている。

70は、小型丸底壺である。器面は摩滅しているが、わずかに範磨きが残る。

71~77は、鉢である。器面は摩滅気味だが、遺存状態の良いものを見ると、密な範磨きが施されている。78も鉢であろう。器面は摩滅する。

79~80は、庄内式系の有段高坏である。摩滅のため、調整不明。81は、在地系の高坏である。82は、器台であろうか。摩滅のため、調整はうかがえない。



Ph.33 その他の出土遺物 5

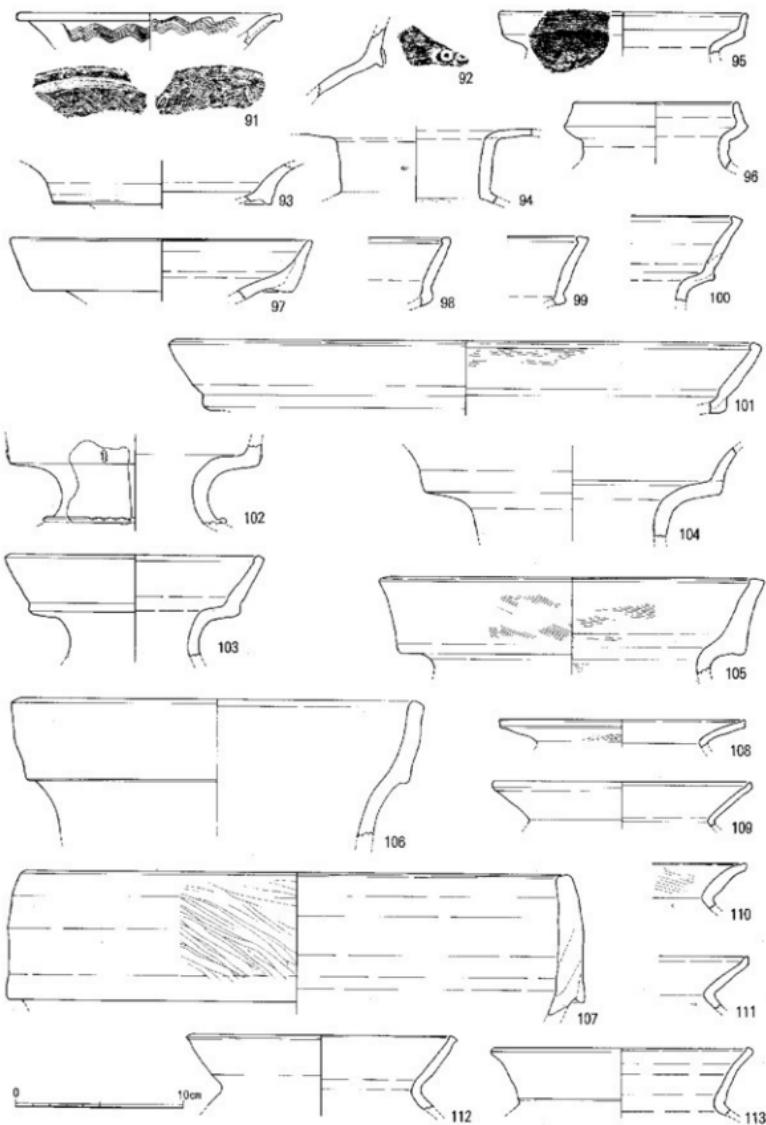
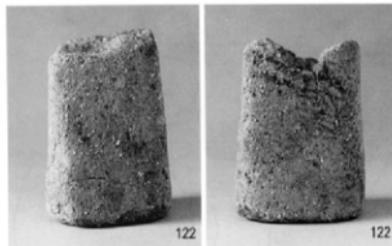


Fig.48 その他の出土遺物実測図 6 (1/3)

83～90には、脚部を集めた。83は、高坏の脚であろう。密に箝磨きする。84は、器形不明。筒状部分には、刷毛目がみられる。赤茶色を呈し、撒入土器と思われる。85は、器台の脚である。86も器台である。外面は箝磨きし、三箇所に穿孔する。87は、高坏である。脚の付け根には、絞り痕が見える。88は、器台であろうか。器面は摩滅している。89は、高坏の脚である。裾は広がるものと思うが、この遺存個体からは明かではない。90は、大きく開いた裾部である。内外面に刷毛目が残る。

Fig.48-91～107は、壺である。91～94は、畿内系の複合口縁壺である。91は口縁部で、内外面に横描き波状文を持つ。92は、口縁の下端から頸部の小片で、口縁下端部に竹管の刺突を持つ円形浮文を貼り付けている。94は、筒状に直立した頸部片で、わずかに残った肩部内面には指揮さえ痕が並ぶ。95は、瀬戸内系の土器であろう。壺の口縁かも知れない。短く直立した口縁部外面には、板撫でによる細沈線が横走している。胎土には角尖石を含んで暗茶色を呈し、明らかに在地の土器胎土とは異なる。撒入土器と思われる。96も在地系の土器にみない形態であり、撒入土器の可能性を考えて良からう。97の口縁は、厚い帯状を呈する。在地系では見かけない形態である。98～101は、山陰系土器であろう。色調は茶褐色～暗茶褐色で、在地系の土器とは異なる。口縁端部が、内方に向かって跳ね上げ気味となる。102は、平坦な帯状の口縁部に継棒状（？）の粘土貼り付けがみられる。頸部と肩部の境には突帯が巡り、突帯上面には小さな刻みが並ぶ。103・104は頸部のくびれも大きく、頸部と口縁部が明瞭に分かれている。それが、105～107では曖昧となり、のっぺりとした形態に変わっている。土器の系譜が異なる可能性もあるが、時期差と捉えることも可能であろう。107は白茶色を呈する土器で、口縁外面は密に箝磨きされている。口径33センチを測る大型壺である。108～113は、壺である。108～110は、庄内式系の壺で、体部内面は箝削り



Ph.34 その他の出土遺物 6

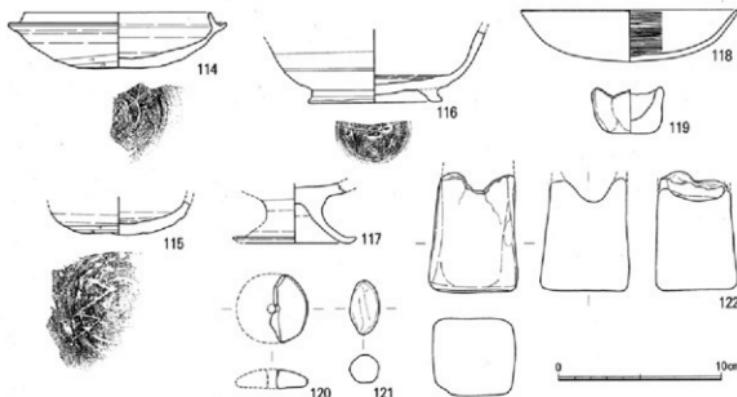


Fig.49 その他の出土遺物実測図 7 (1/3)

し、頸部の内面は鋭い稜線を有す。112・113は、布留式系の甕である。内外面ともに横撫で調整する。

須恵器・土師器・土製品

出土点数が少なかった須恵器と歴史時代の土器、土製品をFig.49に報告する。114～117は、須恵器である。114は、坏身である。内面から体部外面は回転撫で彌整で、底部は回転削りする。底部には籠記号が刻まれる。115も坏身であろう。内面と体部外面は回転撫で、底部は回転削りする。W字形の籠記号がみられる。116は、高台付きの坏である。内外面とも、回転撫で彌整する。高台はやや小さいが、「ハ」字形に高く踏ん張る。117は、脚付きの坏身であろう。回転撫で彌整する。

118は、黒色土器A類（内黒土器）の丸底坏である。外面は淡褐色で、摩滅のため彌整痕は残らない。内面は細い窓磨きがレコードライン状に入り、黒色処理されるために銀化した灰黒色を呈する。胎土は、肌理細かく精良である。畿内系黒色土器であろう。

119は、手捏ね土器である。内外面とも、指押さえで成形される。120は、土製の紡錘車である。平滑に撫で彌整されている。時期不明。121は、投弾である。指撫でで、ラグビーボール形に成形している。弥生時代の遺物である。122は、土製の棒であろう。上端部分のくぼみは、遺物本来のものだが、その両側は折損している。撫で彌整で、全体を平滑な角柱状に整えている。時期ははっきりしないが、出土層位としては弥生時代に属する可能性が強い。

石器・石製品

1～4は、磨製石器である。1は三角形の身を持つもので、中央に鏽があり、断面は菱形を呈する。凝灰岩製であるが、風化のため剥離している。2は木葉形の身を持つが、その半ばを欠失している。身の中央は平に研がれ、刃部のみ斜めに両側から研ぎ出す。凝灰岩である。3は、方柱状を呈する硅化木で、一端を丁寧に研ぎ出して鋭く尖らせる。図に示した面の下三分の二と裏面は、節理面から剥離、基部も欠損している。4は、細長く延びた身の破片である。中央に鏽を持ち、断面は菱形となる。凝灰岩である。

5～26は、打製石器である。5～12は、抉りの浅い凹基式である。黒曜石製。刃部がやや弧を描いて丸みを持つ7・8・9と、直線的な5・6・10～12の二者がある。7は、両面に主剥離面をとどめている。9の切っ先は尖らず、押圧剥離によって平坦に尖らせている。13～20は、平基式である。凹基式と同様に刃部が直線的なもの13～15・18と、丸みを持つものの16・17・19・20とがあり、前者には全体が正三角形に近い13～15と身が長く延びる18がある。17・19・20は、一方の面に主剥離面をとどめている。20は、未製品とするべきかも知れない。21は、凹基式ではあるが、基部に近い身の両側縁が若干くびれている。古銅輝石安山岩製である。22は凹基式の脚部である。黒曜石製。23～26は、未製品である。23は、おむね凹基式石器の形を作るが、一側縁の片面に押圧剥離をした段階で中断している。古銅輝石安山岩である。24も凹基式であろう。基部は大体押圧剥離を終え、刃部を片面から作りかけている。黒曜石製。25・26は、石器の未製品と見ることに、疑問も残る。25は、円基式の石器かとも思うが、先端が作り出されていない。この点から未製品としての可能性を考えたが、他に円基式は全く出土しておらず、確信が持てない。黒曜石である。26は、石器の基部付近かと思ったが、押圧剥離は両面から終えており、基部の形状としては不適当である。黒曜石製。

27は、石錐であろう。先端がわずかに欠けている。細かい押圧剥離で全面を覆うが、一部に細長く風化した面がみられ、原石面が残ったものと思われる。黒曜石である。

29～31は、石匙と考えられる。黒曜石製である。29・30は、刃部の大半を折損したものである。30

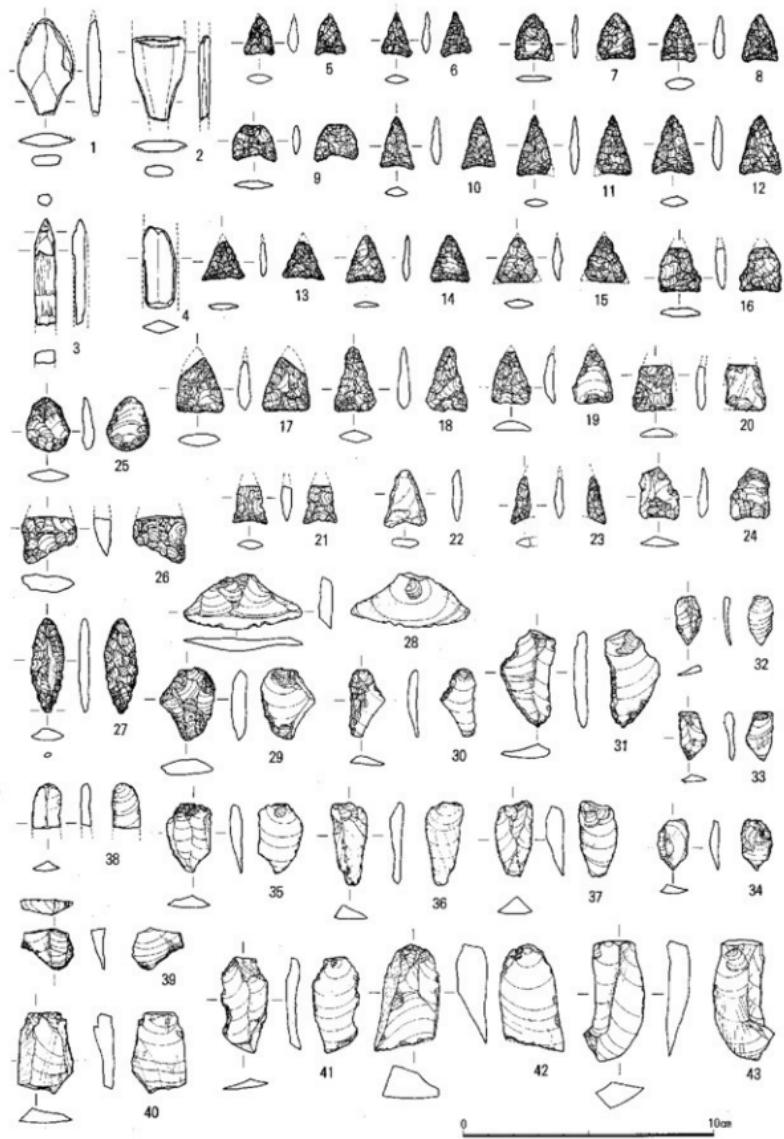


Fig.50 その他の出土遺物実測図 8 (1/2)

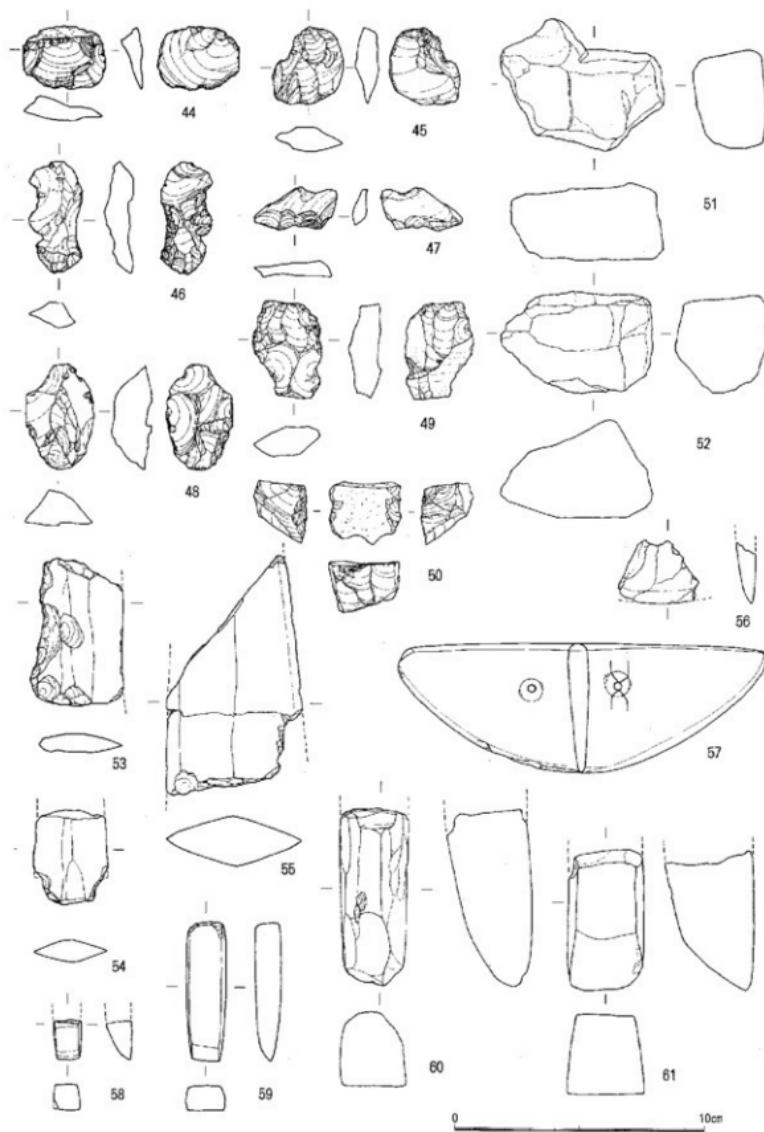


Fig.51 その他の出土遺物実測図 9 (1/2)

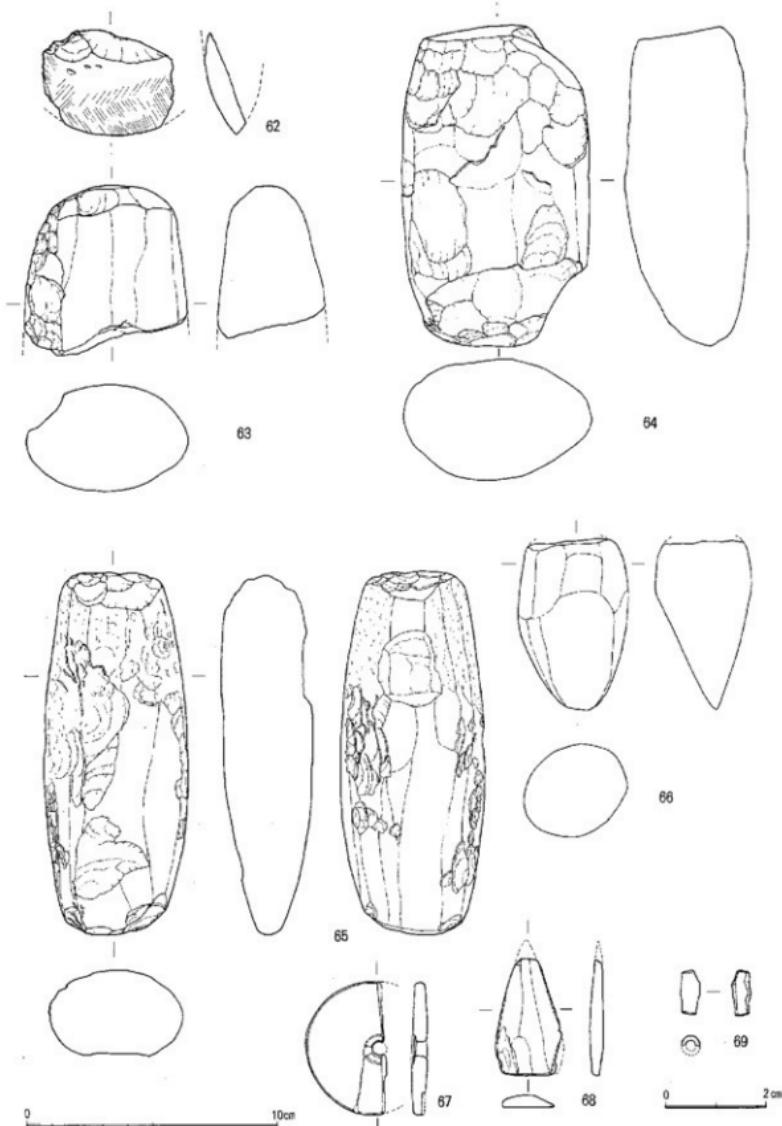
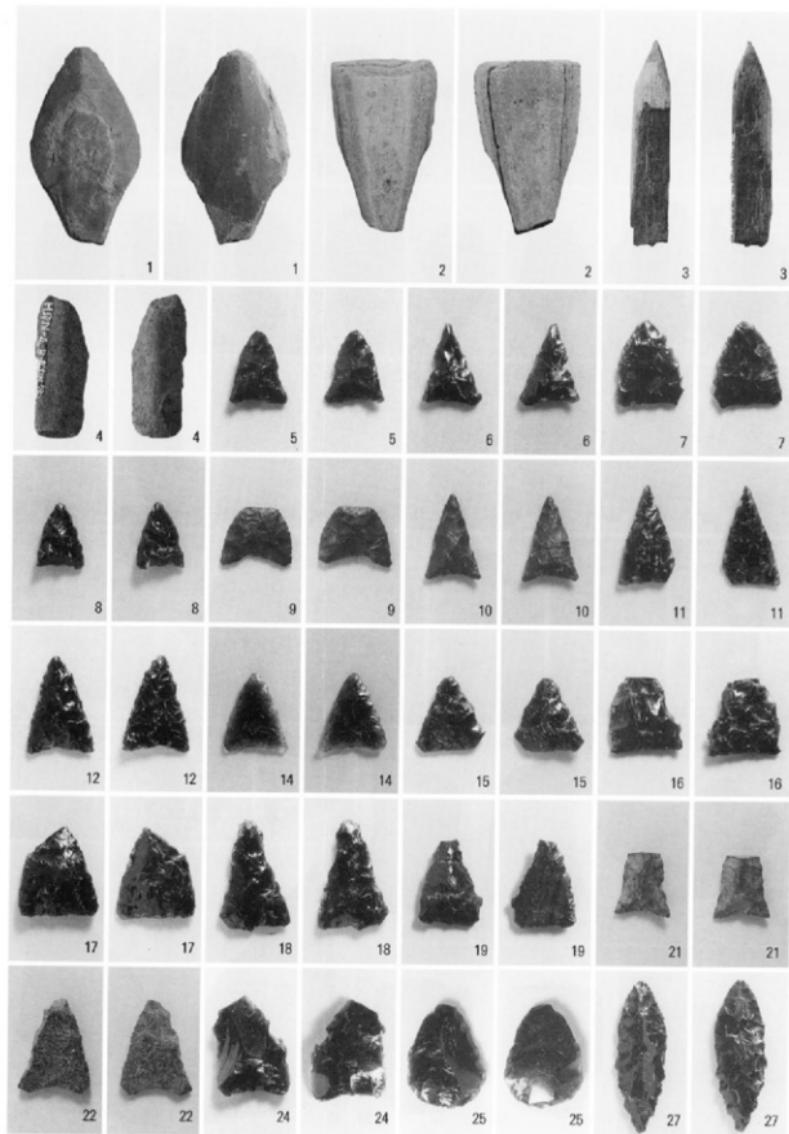
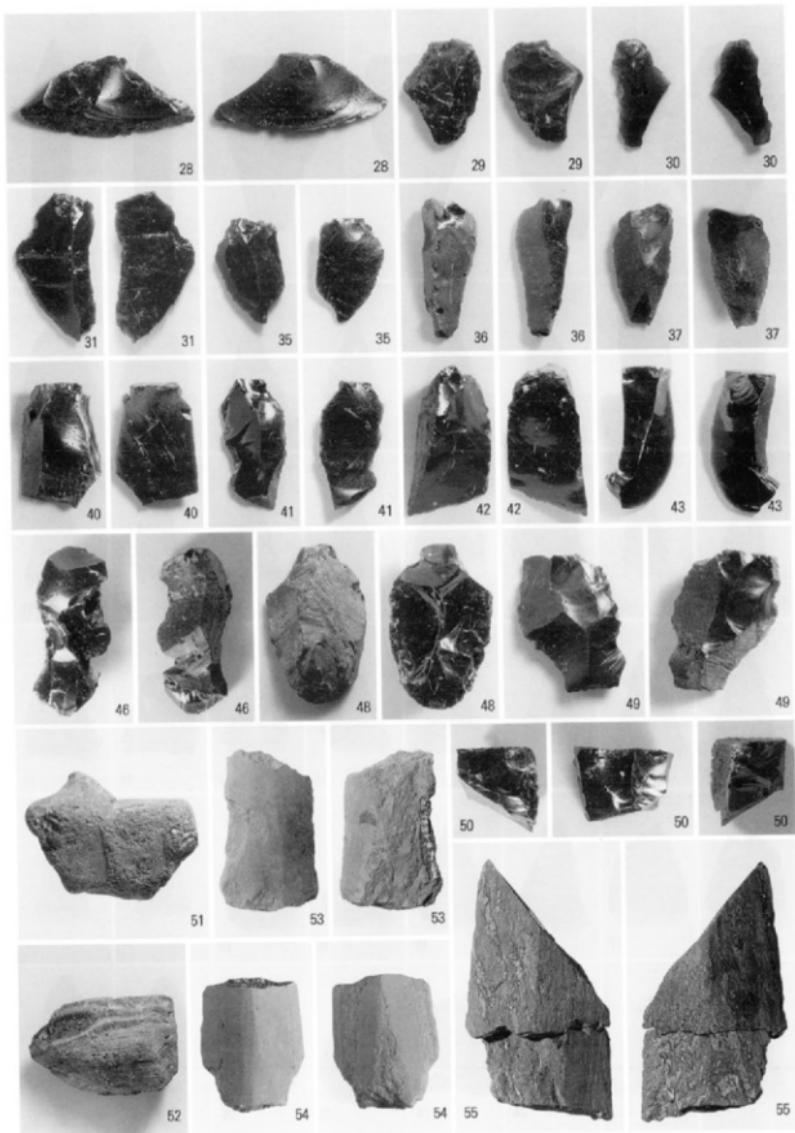


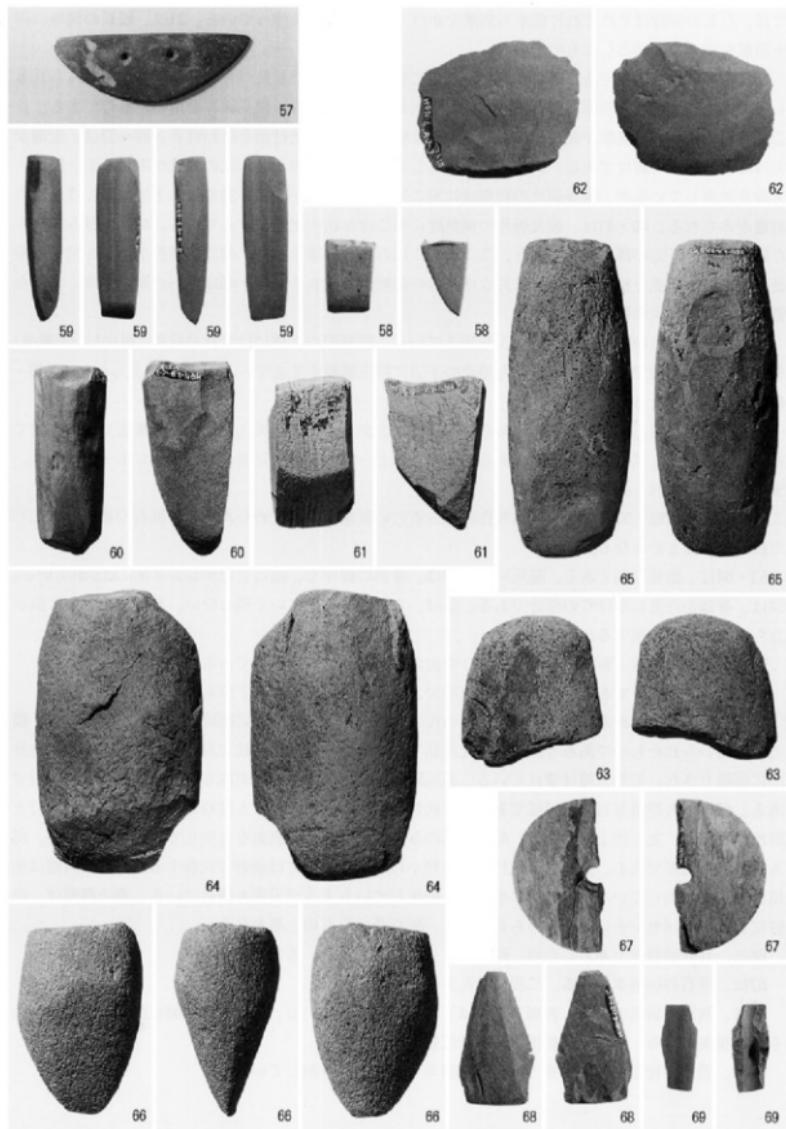
Fig.52 その他の出土遺物実測図 10 (1/2, 69…1/1)



Ph.35 その他の出土遺物 7



Ph. 36 その他の出土遺物 8



Ph.37 その他の出土遺物 9

では、左右の側縁はそれぞれ片面から剥離をかけて、摘み部分を作っている。31は、縦長の側縁に押圧剥離を加え、刃部としたものである。

28・32~45は、剥片であるが、その尖った辺に使用痕の可能性を持つ刃こぼれ状の剥離がみられるものである。すべて、黒曜石である。28は、今回の出土遺物で唯一横長剥片を用いたものである。長辺に、刃こぼれ状の剥離が並ぶ。刃部の傾斜面は粗面であり、素材面と思われる。32~37は、先端が尖った三角形状の剥片である。両側辺の全面もしくは一部に、刃こぼれ状の剥離がみられる。38は、下端を欠失しているが、縦長剥片の両側縁に刃こぼれ状の剥離が並ぶ。39では、下辺に刃こぼれ状の剥離がみられる。40・41は、縦長剥片の両側縁に刃こぼれ状の剥離が並んでいる。42は、厚みを持った剥片だが、下辺が薄く尖っており、ここに刃こぼれ状の剥離を持つ。43は、断面が菱形を呈する縦長剥片である。弧を描いた一側縁に刃こぼれ状の剥離がみられる。44・45は丸形の剥片で薄く尖った側縁に刃こぼれ状の剥離が並ぶ。

46は、一部分に押圧剥離が並び加工を加えている。断面図の上面には素材の粗面（風化した剥離面）を残している。47では、横長に置いた場合の下辺に押圧剥離が並んでいる。粗面は、見られない。46・47共に黒曜石である。

48~50は、黒曜石の石核である。48の山形に盛り上がった面は、風化した古い剥離面で、素材面である。49の裏面も風化した剥離面である。50の上面と一側面には、気泡の抜けたピンホールがあり、原石面と考えられる。

51・52は、黒曜石の素材で、石器製作による新しい剥離面は、認められない。原石の粗面と風化した古い剥離面とからなる。

53・54は、磨製石剣である。凝灰岩製。53は、身部の破片で、鎌は立たずレンズ状に研がれている。54は、身部から茎にかけての部分である。区は、ちょうど欠けていて残らない。身部は、中央に鰯が立ち、断面菱形を呈する。

55は、石戈である。断面菱形に研がれ、中央には鎌が通る。蛇紋岩である。

56・57は、石包丁である。小豆色の凝灰岩で、いわゆる立岩産石包丁である。

58~65は、石斧である。58・59は、小型の片刃石斧である。方柱状に面取りされる。凝灰岩製。鑿として用いられたものであろう。59は、完形品である。60・61は、柱状片刃石斧である。60は、蒲鉾形に面取りされ、刃部先端は潰れている。凝灰岩製。61は、方柱状に面取りされている。シルト岩である。62は、大型蛤刃石斧の刃部である。玄武岩製である。63・64も大型蛤刃石斧であろう。敲打と研磨によって、丸く仕上げている。63は基部のみで、64は刃部の表面を欠失している。玄武岩製。65も玄武岩の石斧である。基部側は敲打、身中程から刃部にかけては研磨で成形する。刃部の両端は使用によって欠失しているが、さらに磨り石に転用しているようで刃先も潰れている。身の裏面は、敲打によって3×4センチほどくぼめられており、柄を受けたものと思われる。

66は、回転研磨器である。全面、研磨によって成形される。砂岩製である。

67は、滑石の紡錘車である。二段に穿孔されている。

68は、剣形石製品である。表面と側面は丁寧に研磨されている。裏面には研磨痕跡はなく、割れたものと推測できる。切っ先は折損する。凝灰岩製。

69は、碧玉の管玉である。長さ9ミリ、幅4ミリを測る。半割している。

第三章　まとめ

本報告書を閉じるに当たって、若干のまとめをおこなう。

今回の発掘調査では、当初水田遺構の検出が予想されたのに反し、溝・柱穴・土坑などの生活遺構を調査することができた。遺構の時期は、縄文時代晩期から古墳時代におよんでいる。そこで、これまで報告してきた遺構を、時期別に整理しておく。

縄文時代晩期終わり頃の遺構としては、43号（土坑）・50号（柱穴）・55号（土坑）・86号（11号土坑）遺構がある。分布としては、調査区の西端付近に固まっている。また、43号遺構・86号遺構は、共に主軸方位を南北に取るだけでなく、同一直線上に位置している。その配置に意図的な要素がある可能性も捨てきれない。

弥生時代の遺構としては、前期では04号（井戸）・56号（土坑）・83号（柱穴）遺構、中期では02号（溝）・22号（井戸）・23号（土坑）・29号（土坑）・42号（土坑）・58号（土坑）・60号（土坑）・71号（土坑）・76号（柱穴）・77号（土坑）遺構、後期では01号遺構（溝）が検出された。今回の発掘調査では、弥生時代中期の遺構が最も多く見つかっている。分布的には、遺構そのものがほとんど見られないC～D区を除いてほぼまんべんなく見られる。後期にいたって遺構の数が激減するのは、集落が終焉を迎えたことを意味するものであろう。01号遺構にしても、後期前半以降に下るものではなく、中期の生活遺構の末尾に位置するものと捉えて大過なかろう。なお、唯一復元することができた1号掘立柱建物跡も中期に属する可能性が高い。

古墳時代前期の遺構としては、19号（小土坑）・36号（畦畔）・52号（小土坑）・53号（小土坑）遺構がある。36号遺構はD区の包含層中に営まれたもので、水田面こそ抽出できなかったが、古墳時代前期には水田化していたことを示す遺構である。ただし、この部分は、前代においても遺構がほとんど見られない範囲であり、耕地化したのが弥生時代に遡る可能性がないとは断言できない。弥生時代の水田や畦畔を検出した訳ではないので、なんとも判断し難いが、弥生時代後期の生活遺構の消滅と合わせ考えて、弥生時代中期で集落が終焉した後、開田されたものと考えたい。

以上、今回の発掘調査では、縄文時代晩期末から弥生時代中期にかけての集落の端をかすめたものと思われる。包含層出土の遺物を見ても、量的にはA～B-1～2区、0区において最も多く、南や西に行くに従って減少している。また、北東側では包含層上位まで弥生時代の土器片が主体であるが、南西端付近では、上層に須恵器片が若干見られるようになる。これと上述した遺構分布とから見て、弥生時代中期以前の集落の中心は、本調査区の北西から北側にあるものと推定できる。

なお、遺構の中心をこのように推測した場合、これまで発掘調査されてきた東那珂遺跡第1次から第3次調査の傾向とは一致しないようと思われる。今回の第4次調査地点とこれまで調査されてきた西側の諸地点とは、異なる遺跡である可能性も想定しなくてはならないだろう。この点については、今後の周辺の発掘調査の成果に委ねたい。

烏田 1

- 烏田遺跡第1次調査の報告 -



調査番号 9743
遺跡略号 K R S-1

例　　言

1. 本章は、道路新設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、烏田遺跡群第1次調査（福岡市東区土井2丁目地内）の発掘調査報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭が作成し、折茂由利が浄書した。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、大庭康時が作成し、折茂由利が浄書した。
6. 遺構写真は、大庭康時が撮影した。
7. 遺物・記録類の整理には、井上涼子・今井民代・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵があたった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9743	遺跡略号	KRS-1
調査地地番	東区土井2丁目地内	分布地図番号	土井
開発面積	2900m ²	調査面積	165m ²
調査期間	1997年9月24日～1997年9月25日		

本文目次

第一章 はじめに.....	51
1. 発掘調査にいたる経過.....	51
2. 発掘調査の組織と構成.....	51
3. 遺跡の立地と歴史的環境.....	52
第二章 発掘調査の記録.....	55
1. 発掘調査の方法と経過.....	55
2. 基本層序.....	56
3. 発掘調査の概要.....	56
4. 遺構と遺物.....	58
(1) 坑	58
1号土坑.....	58
2号土坑.....	58
3号土坑.....	59
5号土坑.....	59
6号土坑.....	59
7号土坑.....	59
(2) 土壙墓	60
4号土坑.....	60
(3) 溝状遺構	61
(4) 井 戸	61
1号井戸.....	61
2号井戸.....	63
第三章 まとめ.....	64

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたる経過

平成9年7月29日付けで、福岡市土木局道路建設部東部建設第1課長より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市東区土井2丁目地内に関する事前審査願いが提出された。申請地は、都市計画道路柏屋久山線の道路整備にともなって、道路が新設される用地である。現況は水田であり、柏屋平野を西流する多々良川に向かって徐々に下降していく。周辺では、埋蔵文化財の存在は知られず、福岡市教育委員会が作成した『埋蔵文化財分布図』東部1においても、包蔵地は示されていない。これに加えて、多々良川北岸の沖積地に立地して河川に近いという点から、遺跡の存在は予想できなかった。そこで、事前審査願いを受けた埋蔵文化財課では、一応の確認のため、同年8月8日試掘調査を実施した。

試掘調査では、申請地内に3本の試掘溝を設定した。その結果、1本の試掘溝から井戸が検出されたのである。これにより、新たな遺跡として、字名から鳥田遺跡が設定された。この試掘調査の結果を受けて、埋蔵文化財課では、井戸が検出された地点を中心に発掘調査が必要であると判断、土木局道路建設部に回答した。

事前審査担当が想定したのは、調査対象面積100平方メートル、調査期間5日であり、調査期間が短かったことから、福岡市博多区吉塚2丁目地内で同じく道路整備関係の発掘調査を行なっていた埋蔵文化財課2係の大庭康時が、吉塚の調査を一時中断して、担当することとなった。

発掘調査には平成9年9月24日着手、翌25日終了した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊（前任） 西憲一郎（現任）
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	柳田純孝（前任） 山崎純男（現任）
	同	第二係長	山口譲治（前任） 力武卓治（現任）
調査庶務	同	第一係	河野敦美 谷口真弓
試掘調査担当	同	第一係	杉山富雄 中村啓太郎
調査担当	同	第二係	大庭康時
調査作業	石川君子 岩隈史朗 清水明 曾根崎昭子	能丸勢津子	

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の東部、土井の丘陵部の麓には多々良川・久原川が裾を洗うように流れている。多々良川が丘陵の縁からわずかに離れた、その間の沖積地に烏田遺跡は立地している。

前述したように、烏田遺跡付近では、これまで埋蔵文化財包蔵地の存在は知られていなかった。そこで、少し視野を広げて周辺の歴史的環境を見てみよう。

旧石器時代では、東約2.5キロの丘陵上にある蒲田部木原遺跡第1次調査においてピット群・台形様石器・ナイフ形石器などの包含層を検出している。また、南東3.4キロの鷺与丁池遺跡でもナイフ形石器等が採集されている。

縄文時代の遺跡としては、遺構は未だ報告されていないが、蒲田部木原遺跡第1次調査で、中期後半の阿高II式土器・後期初頭の坂の下式土器片が出土している。また、蒲田部木原遺跡の南側の低地上に発見された江辻遺跡では、晚期の大規模な集落が調査されている。

弥生時代の遺跡としては、烏田遺跡北側の土井の丘陵状に、多々良大牟田遺跡・上井遺跡が位置している。前者では銅剣・広形銅戈の鋳型、土井遺跡では中細銅戈の鋳型が出土しており、青銅器生産地として注目される地域である。蒲田水ヶ元遺跡では、中期の壇棺墓群や後期の堅穴住居跡が調査されている。蒲田部木原遺跡第2次調査でも後期の堅穴住居跡が検出されている。終末期では、蒲田部木原遺跡の立地する丘陵から小さい谷を隔てた南側の丘陵上に、福岡県指定史跡である平塚古墳が存在する。大型箱式石棺を主体とし、墳頂付近に小型の石棺を配した墳丘墓で、大型石棺内から管玉17点、棺外から内行花文鏡片が出土した。

表柏屋一帯には、平塚古墳と同時期と見られる墳丘墓が点在する。名子道2号墳は、大型箱式石棺の周囲に列石を巡らして墓域を画し、石棺上に偏平な石を積み上げて墳丘をつくる。酒殿遺跡の大型箱式石棺からは、変形夔鳳鏡・管玉が出土している。このほか、亀山神社古墳も大型箱式石棺と、墳頂に小型の箱式石棺を配した墳丘墓である。これらの墳丘墓の被葬者は、小地域を単位とした盟主と考えられている。平塚古墳・名子道古墳とは至近距離にある丘陵上に築かれた天祥森古墳は、盤龍鏡・三角縁神獸鏡を副葬した前方後円墳であり、畿内型の古墳を導入した被葬者によって、それまでの分立した状況が統合されたことを示している。また、蒲田丘陵の西端には、前方後方墳と円墳からなる部木八幡古墳群があるが、未調査である。

古代では、滑石の玉造遺跡が点々と分布している。古大間玉造遺跡では、滑石を加工した古代の玉造跡が調査された。牛ガ熊遺跡は、6世紀中葉～7世紀初頭にかけての滑石製品生産工人集団による特殊占地の集落であったとされる。蒲田部木原遺跡第3次調査においても、古代の玉造工房が調査された。また、蒲田部木原遺跡第3次調査では、古代の倉庫群と、管理棟と思われる掘立柱建物跡が検出されている。

中世では、烏田遺跡から多々良川を挟んだ対岸で、戸原麦尾遺跡が調査されている。1区では組い溝で区画された屋敷群が、2区では13世紀～14世紀前半の七疊で囲まれた半町四方規模の居館が調査された。両者は、時期的に並存しており、2区は在地領主の館、1区は上層農民の屋敷地と位置付けられよう。また、水田・水路も検出された。なお、この遺跡は14世紀前半で突如廃絶しており、報告者は足利尊氏が九州に落ち延びて巻き返しを図った多々良浜合戦のあおりで衰退したものと推測している。烏田遺跡とは、直線距離にしてわずかに500メートルしか離れておらず、本書で報告するように時期的には烏田遺跡が後出するが、両者の関係が注目されるところである。



1. 烏田遺跡
2. 多々良大牢田遺跡
3. 銅劍・銅戈鋌型山土地
4. 土井遺跡
5. 銅戈鋌型出土地
6. 名子道古墳
7. 天神森古墳
8. 蒲田原遺跡
9. 蒲田水ヶ元遺跡
10. 蒲田部木原遺跡
11. 部木八幡古墳群
12. かけ塚古墳群
13. 蒲田遺跡
14. 江辻遺跡
15. 辻畠遺跡
16. 西尾山古墳群
17. 臥田山古墳群
18. 丸山城跡
19. 焼地山古墳群
20. 古大間玉造遺跡
21. 古大間遺跡
22. 駕与丁池遺跡
23. 岩崎神社境内斎場群
24. 東円寺址板碑
25. 王塚古墳
26. 鶴見塚壇棺群
27. 内橋廃寺推定地
28. 戸原麦尾遺跡
29. 広田板碑
30. 多々良込田遺跡

Fig.1 烏田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

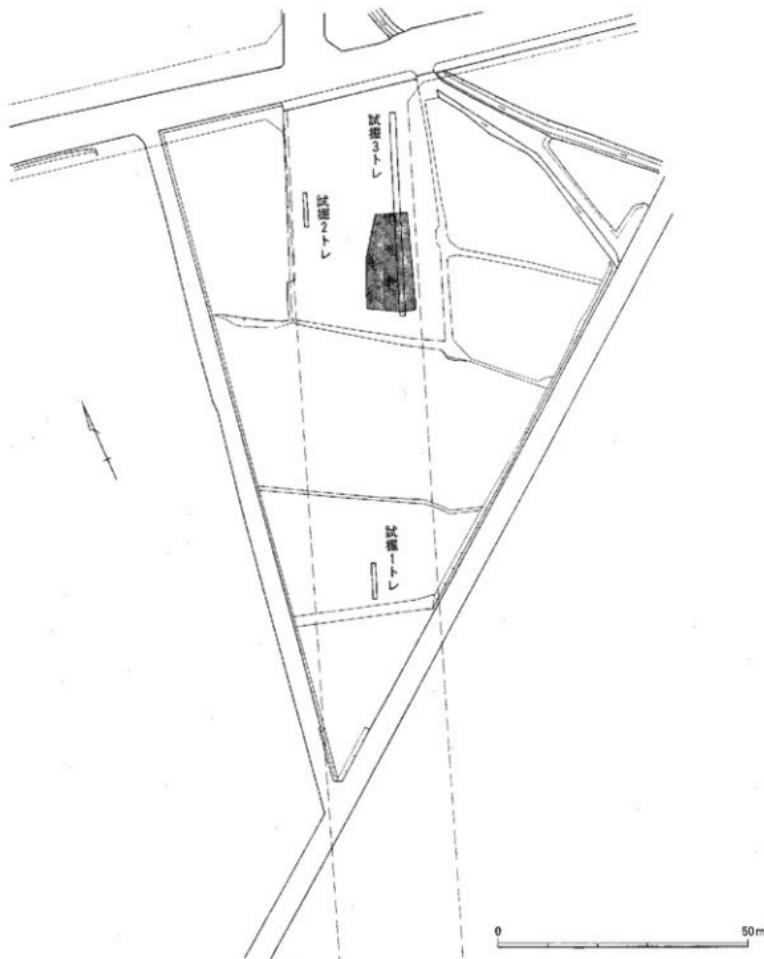


Fig.2 土井鳥田遺跡第1次調査地点位置図 (1/1,000)

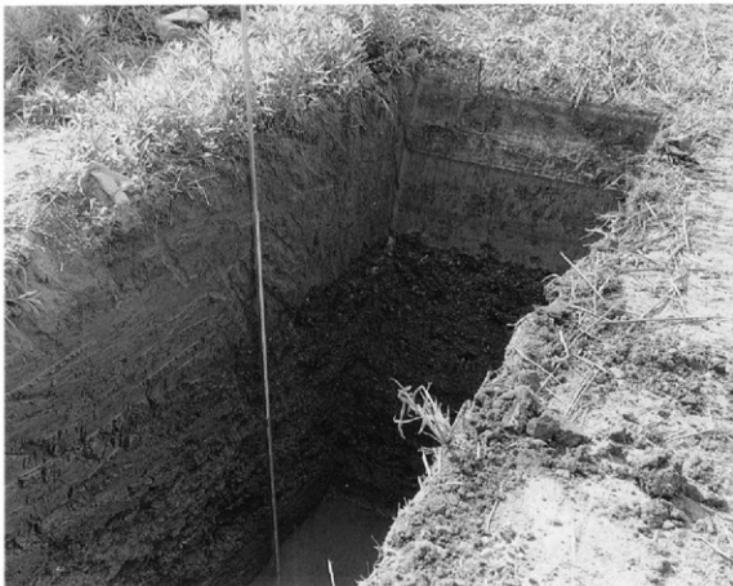
第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

発掘調査に際して、試掘調査によって井戸が検出された地点を取り込んで調査区を設定することとした。ただし、試掘調査なので正確な測量図があるわけではなく、そのため、井戸を当てた第3トレーナーが入れられた水田区画の南端から水田区画の東半分の幅で表土をめくり、遺構の有無を確認しながら北に拡張していくこととした。表土除去にはバックホーを用い、まず最初に堆積状況確認のためのトレーナーを調査区南東隅に開けた。その結果、試掘報告通り、表土水田下のシルト質粘土上に遺構が認められ、それ以下の堆積層には、遺構・遺物は皆無であることを追認した。

表土除去を進めて、予定通り井戸を検出したが、その他の遺構はむしろ井戸付近から激減する傾向がみられたため、調査区の拡張を停止した。その結果、調査面積は、165平方メートルとなった。

発掘調査に着手したのは、平成9年(1997)9月24日である。同日中には、表土除去、遺構検出、遺構精査等の作業をあらかじめ終了し、実測にとりかかった。翌25日遺構の清掃、写真撮影、実測を終了、バックホーによる埋め戻しを行い、発掘調査を終了した。



Ph.1 トレーナー土層(南西より)

2. 基本層序

調査区南東隅に入れたトレンチの写真を示して、層序を説明する。

耕土下30センチほどで、灰色のシルト質粘土層となる。この上面が遺構検出面である。

シルト質粘土層は、厚さ50センチほど堆積しており、以下は砂礫層となる。河川の氾濫による堆積物である。

3. 発掘調査の概要

今回の発掘調査では、柱穴・土坑・井戸・溝を検出したが、遺構密度は浅い。

遺構埋土には、地山と区別がつきにくい灰色粘質土のものと褐色粘質土、両者の中間的なものの三種類があった。

柱穴は、調査区南半分に比較的集中して検出された。ただし、建物としてはまとめきっていない。

土坑には、浅く底が平坦なものと、深く舟底形を呈するものがある。また、枕石と土師器皿を置くものがあり、土壙墓と思われる(4号土坑)。

井戸は、3基が切り合って出土した。1基は、石積みの井側を持つ。

溝は、1条が検出された。

出土遺物は、コンテナ1箱と少なかった。

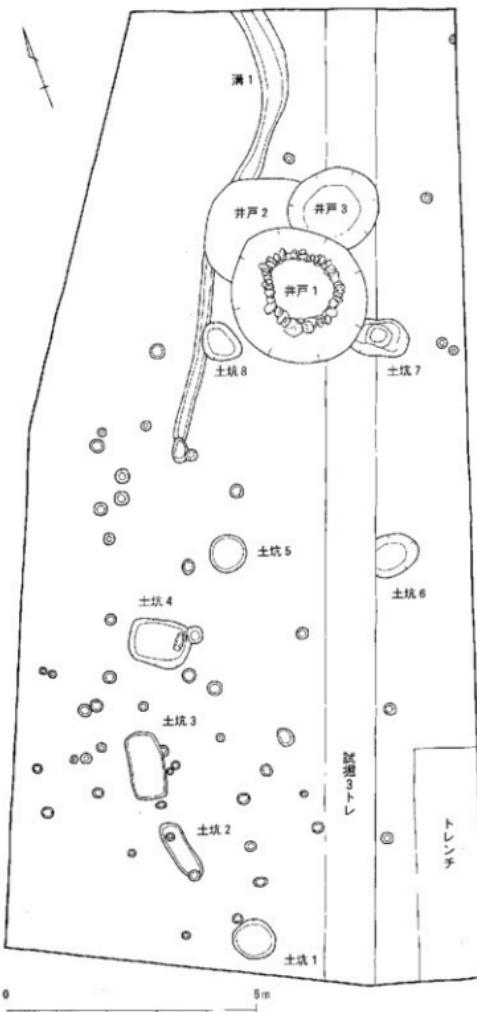


Fig.3 遺構全体図 (1/100)



Ph.2 遺構全景 ((1) 南西より(2) 西より)

4. 遺構と遺物

本節では、遺物が出土しなかった柱穴を除くすべての遺構について、その種類別に遺構の詳細と出土遺物について報告する。

(1) 土坑

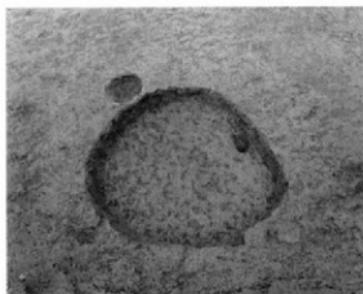
今回の発掘調査では、7基の土坑を検出した。その内の1基は、土壤墓と考えられるので、次の項目で報告する。

1号土坑

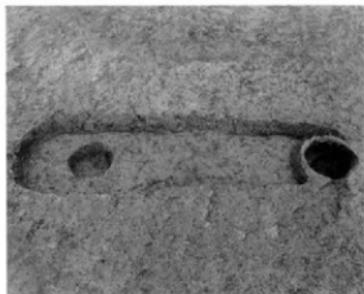
直径80~90センチの円形を呈し、深さは15センチを測る。底面は平坦である。埋土は、灰色粘質土である。出土遺物はない。

2号土坑

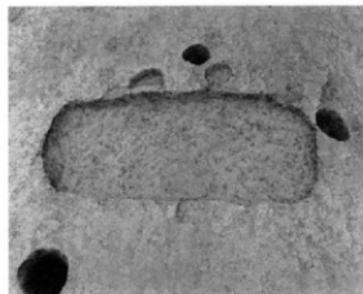
長辺130センチ、短辺45センチの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは、5.7センチを測る。底面は、平坦である。底面から柱穴状のピットが検出されたが、2号土坑に伴うものか否かは明かでは



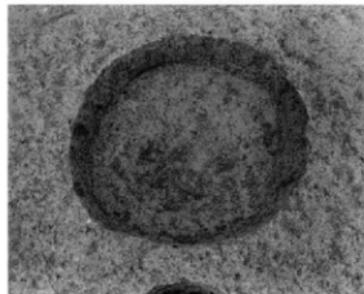
Ph.3 1号土坑（南より）



Ph.4 2号土坑（南西より）



Ph.5 3号土坑（西より）



Ph.6 5号土坑（西より）

ない。埋土は、灰色粘質土である。遺物の出土は、見られなかった。

3号土坑

長辺120センチ、短辺60センチの長方形を呈する。検出面からの深さは7.1センチで、底面は平坦となる。埋土は、灰色粘質土である。遺物の出土は、見られなかった。

5号土坑

直径65~75センチの円形を呈する。検出面からの深さは、17センチを測る。底面は平坦である。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物はない。

6号土坑

試掘調査のトレンチに切られて、一部を失っている。長軸110センチ（推定）、短軸85センチの卵形を呈する。検出面からの深さは、36センチを測る。Ph.7に見るよう壁面の傾斜が大きく、舟底形の底部となる。埋土は、灰褐色粘質土である。遺物の出土はなかった。

7号土坑

1号井戸に切られ、一部を失う。長軸120センチ、短軸75センチの小判形を呈する。底面は、直径45センチほどの円形にくぼむ。検出面から一段目までの深さは25センチ、中央のくぼみはさらに5センチほど下がる。壁面の傾斜は大きく、全体として舟底形となる。埋土は、灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

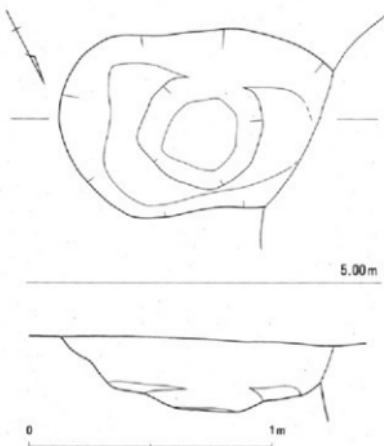
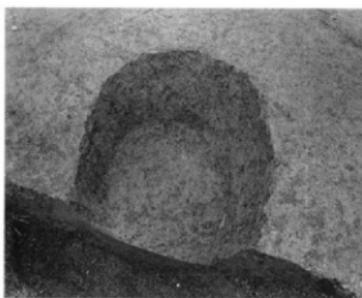
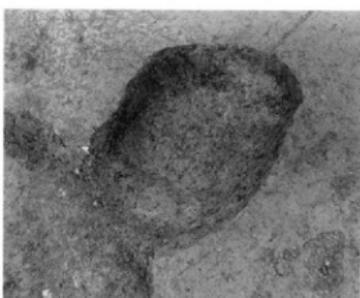


Fig.4 7号土坑実測図 (1/20)



Ph.7 6号土坑 (西より)



Ph.8 7号土坑 (東より)

(2) 土壙墓

4号土坑は、その形状から土壙墓と考えられる。したがって、他の土坑とは別に、土壙墓として項目を立てて、報告する。

1号土壙墓（4号土坑）

長辺120センチ、短辺80センチの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ16センチを測る。底面は、平坦である。埋土は、灰褐色粘質土である。

土坑東壁に沿って、長さ約40センチ、幅15センチ、高さ11センチの細長い石が置かれていた。また、この石の際、一部は石の下に潜り込んで、土師器の壊が出土した（Ph.10）。出土した時点では既に割れていたが、本来は完形品であったと推定できる。この石を、その形状と配置から枕石、土師器を副葬されたものと見て、4号土坑は埋葬遺構、すなわち土壙墓であると判断した。

さらに、枕石・副葬土師器は土坑底面から、1~2センチほど浮き上がっている。よって、この部分に板が敷かれていた可能性も考えられよう。ただし、土坑埋土からは鉄釘の類は全く出土しておらず、金属釘を用いた木棺墓は想定できない。組み合わせ式の木棺墓や木釘で止めた木棺墓、あるいは遺体の下に板を敷いただけであったのか、いずれかであろう。

Fig.5は、土師器の壊である。口径11.9、器高2.8センチ。器面は摩滅している。

15世紀代頃の土壙墓であろう。

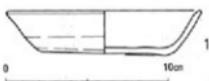


Fig.5 4号土坑出土遺物実測図(1/3)

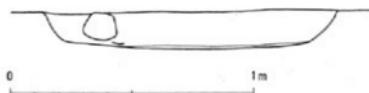
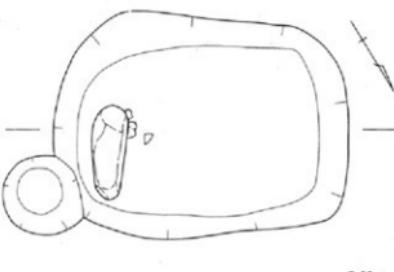
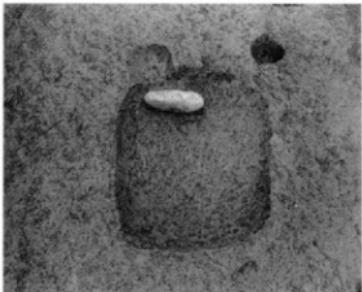


Fig.6 4号土坑実測図(1/20)



Ph.9 4号土坑(西より)



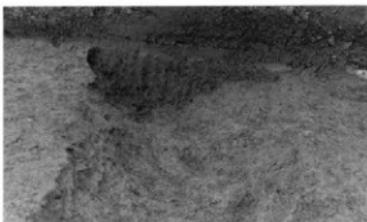
Ph.10 4号土坑遺物出土状況

(3) 溝状遺構

調査区の北辺から中程にかけて、9メートルにわたって検出した。発掘調査の時点では、溝幅の相違から一応2号井戸を境に北側を1号溝、南側を2号溝としたが、明らかに一連の溝である。

溝幅は、調査区北壁近くで60センチ、2号井戸南側で25センチを測る。検出面からの深さは、9～16センチである。断面は、浅いV字形もしくはU字形を呈する。埋土は、灰褐色粘質土である。

遺物は、出土していない。



Ph.11 1号溝状遺構断面（南より）



Ph.12 1号溝状遺構（北より）

(4) 井戸

発掘調査時点では、3基の大型土坑を井戸と考えた。3号井戸は、1号井戸に切られ、2号井戸を切る円形土坑であるが、硬く締まつた粗砂を埋土とする。人力での掘削は断念し、埋め戻し時にバックホーで断ち割ったが、井戸としては確認できなかった。また、他の遺構埋土とは全く違い、土坑を見るのにも躊躇される。性格不明ということで、今回の報告からは割愛する。

1号井戸

鳥田遺跡発見のきっかけとなつた遺構である。検出時には、井戸の内部には、びっしりと砂礫がつまっていた。

直径270センチの略円形の掘り形を持ち、その中央からやや北東寄りに長軸130センチ、短軸110センチの卵形に組まれた石積みの井

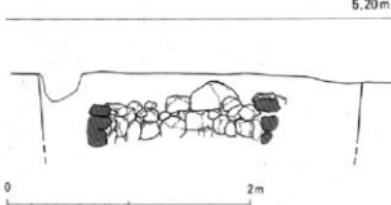
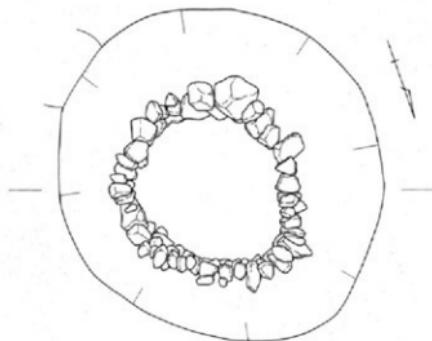


Fig.7 1号井戸実測図 (1/40)

側を築く。この井戸は湧水レベルが非常に高く、検出面から50センチほど下までしか確認できなかつた。埋め戻し時にバックホーで断ち割りし、検出面の下にある砂礫層を抜いて掘り込まれてることを確認した。掘り形埋土は、褐色粘質土である。

出土遺物をFig.8に示す。1は、朝鮮王朝陶磁器の白磁皿である。見込みには、目痕が見られる。2は、中国の青磁碗である。遺存部分については、全面施釉される。3は、土師質土器の土鍋の口縁部



Ph.13 1号井戸（南東より）



Ph.14 1号井戸（東より）

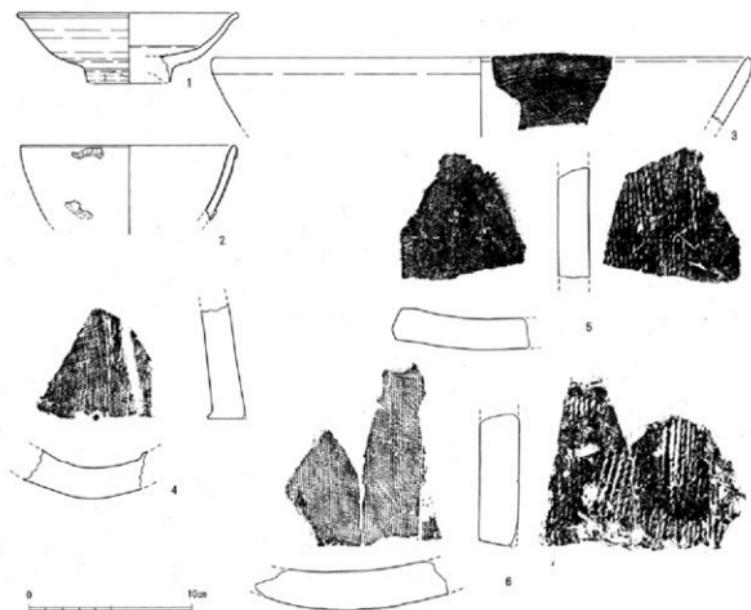


Fig.8 1号井戸出土遺物実測図 (1/3)

である。内面は、横拂で調整される。外面には、すすぐ付着している。4~6は、平瓦破片である。4は須恵質、5・6は土師質である。4~6の上面には布目、5の上面には拂で痕跡、4の下面は拂で、5・6には縄目叩き痕が見られる。

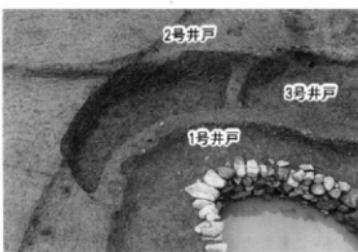
16世紀代の井戸と考えられる。

2号井戸

1号井戸に切られる。溝状遺構とも切り合うが、調査時には前後関係の判断はつかなかった。出土遺物の示す時代観からすれば、溝状遺構に先行するものと思われる。

素掘りの井戸である。掘り形は、推定で直径220センチの円形を呈する。湧水のため、最下部では調査できなかった。バックホーによる断ち割りでは、標高3.6メートル付近で底にいたる。

出土遺物を、Fig.9に示す。1~3は、土師器である。1・2は壺である。器面は摩滅し、調整痕は残らない。3は、壺である。口縁部内面は横刷毛、体部内面は削り、口縁部外表面は横拂で、体部外表面は縦刷毛である。4~11は、須恵器である。4・5は壺蓋で、端部を下方に折り曲げる。体部は、横拂で調整される。6・7は、皿である。横拂で調整される。7の底部には、木葉痕が付いている。8は、壺



Ph.15 井戸（南東より）

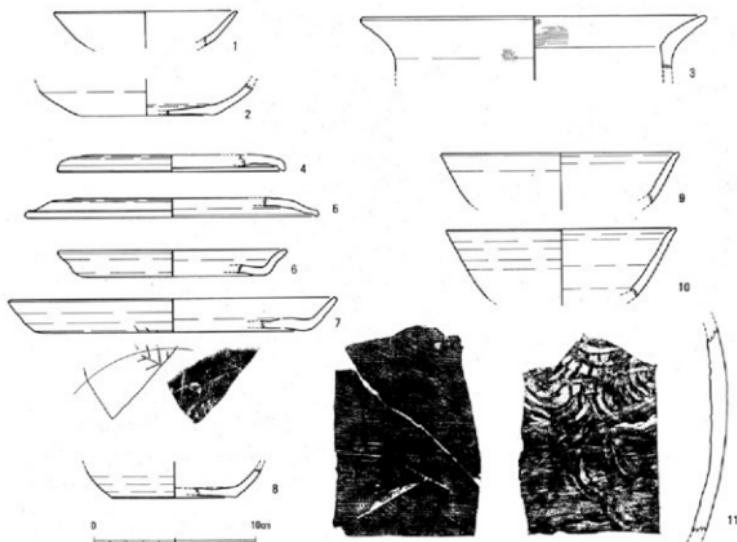


Fig.9 2号井戸出土遺物実測図 (1/3)

である。体部は横撫で、内底部は撫で調整、外底部は回転範切りする。9・10は、高台付き壺の体部であろう。内外面とも横撫である。11は、壺の体部である。外面には刷毛目痕が、内面には同心円叩き痕が認められる。

8世紀後半の井戸であろう。

第三章 まとめ

最後に、鳥田遺跡第1次調査の成果について、簡単にまとめておく。

鳥田遺跡は、これまで存在が確認されていなかった新発見の遺跡である。柱穴・土坑・井戸・溝などを検出したが、遺構密度は薄い。各遺構の深さや、遺構検出面が浅いことを見れば、既に大規模な削平を受けており、かなりの遺構が失われたものと推測することは可能であろう。

土坑は、8基を検出した。4号土坑は、長方形のプランを呈し、南東の小口近くに枕状の石をおき、副葬されたと思われる土師器皿が出土しており、土壙墓と考えられる。土師器皿の年代観から、15世紀代に属するものであろう。

井戸は、切り合って2基を調査した。1号井戸は、井戸側に小礫を積むもので、朝鮮王朝白磁碗・土鍋・瓦等の出土から16世紀頃の井戸と推定できる。2号井戸は素掘りで、土師器・須恵器片が出土した。これらの遺物からは、8世紀末頃の時期が考えられる。

溝状遺構は、深いV字状の小溝で、区画溝と考えている。時期は不明だが、埋土が、1号井戸に切られる7号井戸や土壙墓である4号土坑と共通することから、15世紀頃の遺構と考えて大過なかろう。

柱穴の配置から掘立柱建物跡を復元することは、できなかった。

全体的な遺構分布を見ると、調査区の南半分に集中しているように見える。しかし、調査区付近は北から南の多々良川に向かって傾斜する地形であり、本調査区においても、旧地形は北側が高かったものと思われる。上述したように、調査区の水田がすでに削平を受けていることは明かで、必然的に北側では削平の度合いが大きかったこととなる。遺構密度が低い調査区北半において井戸が検出されていることは、本来の遺構分布が、決して南側に限られていなかったことを示している。一方、試掘調査の結果を見ると、発掘調査区を設定した水田から二枚多々良川よりの水田の低地帯に入れた第2トレンチでは、全く遺構は確認できなかった。このトレンチは、地形的には削平の浅い部分に当たるはずで、遺構が営まれていれば、試掘調査で検出できて然るべき地点である。したがって、試掘調査の第2トレンチ付近までは、遺跡は広がっていないかったものと思われる。こうしてみると、本調査地点の南側で遺跡は終わるものと言えよう。

以上の結果から、本調査地点周辺には、奈良時代後半と中世後半期の集落が広がっていたものと推測できる。

鳥田遺跡は新発見の遺跡で、周辺にも発掘調査例がなく、遺跡の具体的な姿を探る手がかりにかける。今後の発掘調査に期待するしかない訳であるが、今回の発掘調査が、これまで全くその姿を隠していた中世集落遺跡の一端をとらえ、今後の解明のきっかけを作ったことをもって、第1次調査の最大の成果としたい。

東那珂4・烏田1

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第637集

平成12年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大光印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目13番16号